

第十八章 本町の生んだ偉人

鴨島の人物誌 その一

第一節 人物史の概況

1、本町の産んだ偉人

我が郷に誉残せし偉人まれびとを

慕いまつりて鑑とやせん。

なつかしい我が郷土が産んだ偉人！それは何よりも尊い我等の心のかてである。一世の師表として宗教界に名をなした泉智等大僧正をはじめ、数多くの模範とすべき先輩を出している。

政治界、実業界に功労の多かつた川真田徳三郎、川真田市太郎（市兵衛）をはじめとし、元帝室技芸員野口小蕨こは女史の父は鴨島町喜来の出身であつて、女史は女流書家として一世に名をはせ、時々皇室の御下命をうけ、従七位を賜わり、大正四年には御即位の悠紀地方の屏風を描き、この上もない光栄に浴した。

孝子真淵イヨ女史は、上下島に生まれ、孝養の心厚く、終生孤独にて両親に孝養をつくし、徳島藩、名東県から表彰をうけ、我が町の孝子としてあがめられている。

喜来出身の佐渡善兵氏は、十五歳の時上阪し、苦学奮闘の末、船成金として名をなし、本町製糸業のためにも、大いに力を添えられた。

同じく喜来からは元日本石油社長、寺田洪一氏を出している。氏は中学卒業後、志を立てて上京し、風呂たき、車夫などをして、刻苦勉励、遂に欧米を巡遊して、石油瓦斯等の事業に尽くす所多く、一代

に巨万の富をつくった成功者である。

同喜来出身の今津亦兵衛氏も、十六歳にして上阪、金沢仁兵衛氏方に奉公し、後志を立てて独立し、肥料・土地等の事業によって一躍百万長者となった成功者である。

川真田鹿太郎氏は、三十ヶ年、本町自治のため力を尽くされ、今日の自治の基をきずかれた恩人である。

以上は故人であるが、健在していられる方で故人に劣らぬ人々が多い。朝鮮の開拓王、不二農園の経営者として時めいている寺田洪一氏の弟、藤井寛太郎氏、日本一の喜劇家、曾我廼家さんも本町の出身であり、武智正次郎氏は、大学卒業後、大阪に工務所を開き、世界十ヶ国に余る専売特許権を得て飛躍している。

町内には模範製糸工場を経営されている筒井直太郎氏が、清らかな人格をもって、実業政治のため力をつくし、前町長、武智加之吉氏は本町自治のため、県治県政のために尽くされた人格者であり、川真田治助氏は社会公共のため学校教育のため尽力されている感心な方である。尚、このほかにも幾多の感心な先輩を見出す事が出来る。我等は郷土の先輩の歩みし跡をたどり、大いに奮闘努力せねばならぬ。

「鴨島読本(昭和五年)」記より

第二節 経歴紹介と秘話

1、江川堤の功労者 —— 川真田市兵衛(五代目本万市太郎) ——

天保一三年(一八四二)二月一〇日生まれ、大正八年五月三〇日、七十七才で死去された。

氏は明治初年より阿波藍製業と販路拡張に尽力され、藍商取締会社「精藍社(明治八年)、後に名藍社」を組織する。

特に、明治五年、吉野川の氾濫を防ぐため、川島町より喜来村にいたる大提防を築く。これによって、流域数百町歩、一一ヶ村は洪水の災を免れた。明治二〇年、阿波国共同汽船株、電燈株を興すなど、北万の徳三郎氏とともに活躍した。明治三十一年、衆議院議員に当選する。

※ 関連記事 第四章をご参考下さい。

2、第一回衆議院議員 —— 川真田徳三郎(三代目北万) ——

万延元年(一八六〇)二月三日生まれ、幼名国三郎、明治一八年県議會議員をふりだしに政界入りする。

明治二三年の第一回衆議院議院に、三〇歳の若さであげられ、連続八回に及び当選した政界の重鎮。



泉智等氏

3、高野山大僧正 — 泉智等 —

大正七年一月二二日、五十八歳で死去された。

徳三郎氏は実業界では、本万市太郎氏とともに阿波藍製販の改善や阿波国共同汽船(株)を興したが最も大きな功績は、徳島鉄道(株)を興し、明治三二年に徳島—鴨島間にレールを開設するに至らしたことである。この功績は、松方侯爵こうしやく、芳川顕正伯の碑文が長久とくしえに光を放っている。

※ 関連記事 第四章をご参考下さい。



川真田徳三郎公德碑

高野山座主大僧正泉智等師は、嘉永二年一月一二日に花栴町長さんの家に生まれた方です。

十二歳の時、板野郡の碩道和尚について修業をはじめ、蜂須賀塾へも通って一心に漢文を習いました。

明治二年から高野山と京都で修業をつみ、同六年阿波の国泉福寺の住職となり、莊嚴院、高野山真別所、大阪の大福院、北海道の高野寺、讃岐の善通寺、東京の別院等、北は北海道から南は九州まで、日本全国にわたる十七ヶ寺の住職となって、多くの人を救い、明治二十年か

ら毎年宮中で行われる五七日の御修行に奉仕するの光栄に浴しました。

明治八年の頃から全国を巡って説教をはじめました。大僧正はお説教が大そうお上手で、泉さんのお説教を聞いた人は、老若男女すべて感心しないものはありませんでした。

明治三十年には、小松宮殿下の命をうけ、京都の仁和寺の大僧正となり、八年間この寺のために尽くしました。

大僧正は、大へんお徳の高い方でしたから、明治四十一年、選ばれて皇室の菩提寺泉涌寺の長老となり、歴代天皇の御霊にお仕え申し上げ、明治天皇から高い位をいただきました。

後、高野山の管長という真言宗の僧侶の中で一番高い位につき、高野山に大学をおこし、図書館を設けるなど、世のために尽くされました。

このように大僧正は知徳人にすぐれた方で、明治、大正、昭和の三代にわたり、真言宗のために力を尽くされました。又、大僧正は詩文をよくし、書家の大家として知られ、鴨島小学校のためにも揮毫して下さいました。講堂にある「徳不孤とくはこならず」の額と、裁縫室の「忠信文行」の遺墨がそれであります。

かくて、昭和

三年九月二十五

日、高野山金剛

峰寺で多くのお

弟子達に守られ

て、年八十で遷せま

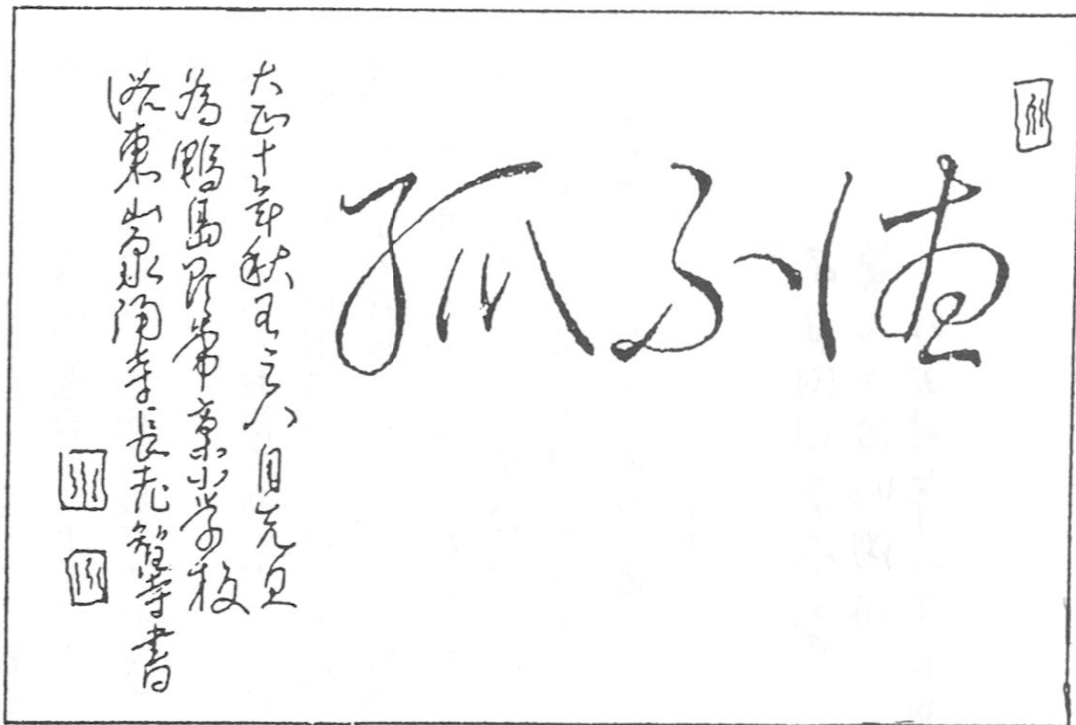
化げされました。

その高德は「徳とく



絶 筆

不孤^{はくからず}」の言葉と共にいつの世までも光を放っています。



泉 大僧正

ゆかりも深き鴨島

殿郷の里に生い立ちて

残す其の名は高野山

徳の泉の智等様

山より高き僧正の

徳になびかぬ里もなく

やがては仕う九重に

徳の泉の智等様

修むる徳は孤ならずと

悟せし言葉とこしえに

我が学びに仰ぎ見る

徳の泉の智等様

「鴨島読本」より

4、ノンキな父さん

—— 喜劇名優 武智故平 ——



鴨島駅前 の 碑

鴨島駅前に「のんきな父さん」の姿が刻まれ、道行く人に親しさと和やかさを呼びかけている。これが本名武智故平、曾我廼家五九郎の出演の一ふん装姿である。

氏は明治九年上下島大北に生まれた。家は裕福でなかったので、小学校を卒えると何か期する所あって、東京へ出た。当時東京には自由民権運動をしていた板垣退助がいて、運動を支援する多くの壮士がいた。氏はこの人々に知人を得、政治に奔走するようになった。しかし生活には恵まれず、東京では志を得なく大阪へ下った。

故平氏は、元来、人なつこい人で、座談は得意で人との交際も上手で特に字書きはうまかった。大阪へ下った氏は俳優を志し、喜劇の名優曾我廼家五九郎の門をたたいて、弟子にしてくれと願った。五郎は「君は俳優に向かない」と追い返そうとし、別れぎわに「ご苦労様」といった。

その時、氏は「五九郎で結構です」と居座った。この頓智に五郎は心ひかれて弟子とした。これより氏は喜劇俳優の道に入り、芸名を曾我廼家五九郎と号し、五郎の座に加わったが、飄逸な風貌と芸風は一座で頭角を現わし名優への道を進んだ。

五九郎の叡智と才覚は世事より芸題を創作し、名作を出して人を笑わせたり、泣かせたり、世に認められるようになった。

時を得て一座を成し、再び上京、東京浅草の観音劇場で旗を上げ、「のんきな父さん」の風貌、服装、芸風は世にもてはやされ、その漫画も世に広がり、世人より親生まれ、愛され、喜劇王の名を得た。

大正十二年、上下島若宮神社に玉垣建立の議が出たが資金に困っていた時、玉垣の東側で寄付者名の見えない所を寄進し、八月に建立を成就させた。氏の奥ゆかしい人徳の現われとして尊敬された。

(1) 曾我廼家さんの話

劇界の快男子、五九郎氏は静かに演壇に上った。コップに一ぱいの湯をそそいで、一口ぐツと呑んで、眼鏡越しに一わたり聴衆をながめて、しばらくは無言！

満場の目と心はやがて語り出さんとする曾我廼家の語を予想して彼の口にそそがれた。

「えエ……この向こうの上下島」

おもむろに口を開いて上下島の方向を指さす。

「皆さんは御存じあるまいが、昔上下島にいた武智亀之助という者の倅せがれでござす。音量の豊かなどっしりした声である。

「私の小さい時、私の家には二十円の借りがあつたのですが、それがどうしても払えなかつた。その頃はこの着物を染める藍、その葉藍がこの町の主なる産物であつたのです。ところが私の親はその藍をつくって一年の生計を立てていたので、ところがその藍をつくる畑を持っていないので全て人から預かつて、小作をしていたので非常な貧乏であつた。一年の間、夜も寝ず、粗末なものを食べて、土用の暑い炎天に葉藍を切つて、筵むしろにひろげて乾し、晩はその上に筵の小屋を立ててそこに寝て番をして、ようやく出来上つたものを、問屋、その頃はここの方かた、それから向こうの戸田へ売るので、こうして一年中かかつてもうけたお金は僅か百円位、その中で肥料代こやしを払い、地代を払い来年のしこみをしていると残らなくなる。一年中寝食を忘れて働いてどうしても二十円が払えない。その苦しみを子供ながらも見

ておれない。気の毒でならなかつた……。これはどうしても私がしつかり働いて、早く安心させてあげねばならないという決心から、十四才の春、思い立って東京へ出たのです。

私が出たのは、親を安心させたいという目的です。しかしお金がないので、汽車に乗るわけには行かぬ。汽車よりか安い船で行きました。ところが私が東京へ出て、沢山の人につき合つて見て、第一に感じたことは、学問がないという事でした。あゝ、あの学校へ行つていた時分によく勉強していればよかつた。と、思いました。そこでどうかして、勉強して一人前の学問がうけたいと思ひました。そして、板垣さんの宅の玄関番に住みこみました。(板垣退助氏のこと)そうして夜学に通わせていただくことになりました。ところが昼間一生懸命に働いているので、そのつかれで学校でねむくつて困りました。これではほんとうの勉強にならない。

皆さんは、おとつあん、おつかさんがおそろいで慈しみ深い親に学校へ入れてもらつて、りっぱな学校でよい先生に教おそわるのですから、私のでつをふまぬように学問に精出されてりっぱにならなければなりません。

私の小さい頃は、この向こうの大通りにあつた尋常科に通いました。そして苦しい貧乏な生活の中から高等科へも通わせてもらいました。川島にあつた高等小学校へ毎朝通いました。その途中今、大阪にいる工学士、請負業をしておられる上下島の武智正次郎君、この人を誘つて行きました。ところが正次郎君は洋服を着て靴をはいて行くのですが、私は貧乏だからそんな贅ぜいたく沢は出来ない。でも子供心にも、「あゝ、あんな靴がはいて見たいなあ！

ギュー／＼なるやつがはいて見たいなあ。」

と思つたこともありましたが辛抱しました。ところがその高等科も半年ばかりでやめなければならなくなりしました。家が貧乏なからです。貧しいために月々はらう僅かの月謝が払えないのです。そこで、こ



壮年時代の五九郎丈
(武智宏鳴氏提供)

れはどうしても自分がお金をもうけて、親を安心させねばならない義務がある。というので東京へ出たわけです。そして二十の歳に親を喜ばせたいと思って、苦学しつづけたためたお金をもって、二十円のかりを払いに帰ったのです。ところが私のうちは、その後年々貧乏をして、もうこちらで居られなくなって北海道へ畑をもらいうけて移った後なのでした。私はこの上もなく落胆しました。

後、東京へ帰っていても親にあえないか、もう船は沖を通らないだろうかと、時々小高い物ほし台の上へ上って、沖を通る船をながめていました。東京にいても気が気でないので、二、三年後、北海道へ逢いに行きました。ところが向こうへ行つて見ると、札幌の東北二里の所に、このあたりのようなよく肥えた美しい土地ではなくて、こんな大きな一かかえもある木が一ぱいはえている、熊の出そうなきみしい所にすんでいました。

そこに、麦わらのたばを廻して、壁のない家をつくってしまいました。私のついたのは雪のふる寒い冬でした。その麦わらのたばの間から、雪が吹きこんで寝ている蒲団ふとんの上に五寸位雪が積っているのです。

私はそれを見て泣きました。

そんな寒い所で太い木を枝打ちをして、それを割って、こちらでいう割木わりきですね、あちらではまきといいますが、それをこしらえて、乾しておいて、札幌の町へ売りに行くのです。そうして一本一銭五厘か二銭に売って、一年中のお小使いをもうけていたのです。そこで私は親にこんな苦勞をかけてはすまない。もう少ししっかりせねば

ならないと一層励みました。そして両親を東京へ引き取って大切に育はぐみました。

お父さんは二、三年前に安心をしてくなくなりなれました。今はお母さんが七十で生きて東京に居られますが、別荘をこしらえて、その中で女中にお守りをさせて、毎日この頃はすきな浄瑠璃じょうるりのけいこをして楽しんでおられます。

私は何でもよいもう親の考えにさからわずに、思うとおりに、させてあげたいと思っております。これがせめてもの私の願いなのです。

私は常にお日様、太陽を尊敬しています。

この太陽くらいよく働くものがありますか。毎日／＼夜が明ければ出て、休まずたゆまず世界を照して働いている。私は太陽をモットーとして働いている。太陽が入った夜は休むが、私はまだ一度もお日様の出ているとき眠ったことはない。昼寝をむさぼったりするのは、もったいないことです。

かく時間を大切につかっています。はりきった心持、で常にいるので、まだ一日も病にかかって太陽の出ている時に寝たようなことはありません。皆さんも時間を大切にして、きつと、りっぱな人になって下さい。私とあなたとあっている今という時間は、世界はじまって以来またこれからも二度とはないのであります。私はいつもそういう心持、で時間を尊重して働いています。

慈いづくしみ深い父母に養われて、りっぱな先生の下に学問している皆さん！自分の家の営業をつがれる人もあるでしょう。又、他に出て働く人もあるでしょう。どうか世の中に名をなす人になって、先生方の御恩に報いて下さい。しかし、どこまでも身体が大切ですから、身体に気をつけなされるよう、いくら頭の働きのよい人でも身体が弱くは働きが出来ません。

どうか私のようになつたらぬ者のいった事でも、無意義にしないよう、何かの役に立てて下さい。そうすれば曾我廼家五九郎武智故平は喜びます。」

と、いって頭を下げ、静かに壇を下りた。

期せずして拍手は起こった。しばらくは講堂も張りさけんばかりに「曾我廼家さんはお芝居が上手なばかりでなく孝行な方だ、勤勉な方だ。」と、そこここでささやく声が聞こえた。

「帰郷講演記録、鴨島読本」より

- (2) 「ノンキナトウサン碑に寄せて」
(イ) ロバに乗って楽屋入り

小生 夢坊

郷土のことを、そぞろに感じた口調で、大阪の夜の宿での武智故平氏が私にはなしかけた、あの顔を今でもおもい出します。

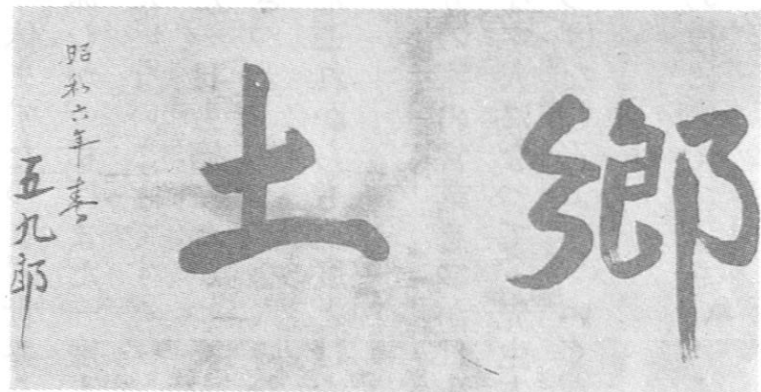
どもったような五九郎丈のセリフは、独得の味です。徳島の阿波踊りからのヒントとおもうが、「ノンキナトウサン」の花見の巻で両手をあげ、踊りながら、私のつくった舞台装置の山に登ってゆくすがたは、まさに天下一品。庶民のこころのすがただと感嘆して、脚色の金子洋文氏と手を叩いたものでした。ちょうどその初日の松竹座に、吉川英治氏が見物に来てくれて、五九郎丈と金子氏とそ

の吉川氏と私とで浅草の一直でメシを喰って、イヤ酒をあふったものです。

日本一の喜劇俳優！
自由民権の壮士 武智故平！

そのノンキナトウサンの記念碑を、政治と芸能を結びつけて平和な郷土のために建立すべく発願された町長川真田郁夫氏に、敬意を表し、心から感激の拍手をささげるものです。

浅草の奥山に建てたノンキナトウサンと、それを囲む永生の壁には、私が日本ではじめての民族芸能



五九郎丈の揮毫（昭和6年春）



麻生豊えがく のんきなとうさん
大正12年11月25日報知新聞夕刊から

使節団長として中国に招かれて参ったとき、郭沫若氏から題字を揮毫してもらいました。それが石にきざまれています。武智故平氏は、中国が大好きで、自ら浅草の南元町の家に中国風の椅子をならべていましたし、庭に中国から届けられたロバの小屋をつくりました。そのロバにまたがって市村座に楽屋入りしたことなども、子供のころをもつ邪気のない一面がありました。いまどきのタレントのような打算打算でキタナイのところがいます。

むかし五九郎劇で私が四国に参りましたとき、たのまれて「徳島夜曲」をつくり、舞台上で五九郎丈が美しい女優たちに囲まれて唄いましたが、そぞろ、そのころのことが浮かびます。

(国際人文学会理事長・民族芸能を守る会副会長・元五九郎劇団文芸部長)

(回) 五九郎秘話「報恩寺の大酒宴」

綱野宥俊

初代五九郎丈の故郷を訪ねてみたいと参議院議員三木与吉郎氏にお願いして郷土史家の後藤捷一氏に

ご案内をいただく。

まず三木産業の社長室で川真田郁夫氏に面接する。氏は県議で、五九郎丈とは同じ鴨島出身。学生時代にはしばしば楽屋を訪れて親交を温めた由。

「敷島を二、三服吸っては、次から次へと火鉢の中へさしてしまい、ゼイタクな吸い方でもったいなアと思った。人柄は至極豪放でこのましい人だった。」などと思ひ出に花が咲く。氏のご斡旋で鴨島の旅館に二泊する。

誕生地は上下島と称し、九十番屋敷というところ。ここ

で産ぶ声をあげた武智家の長男故平が後の名優五九郎丈である。

戸籍謄本によれば明治九年四月十三日生まれ。父は亀之助、母はミヤ、次男民次は大阪でインク製造業をやっている、兄の故平とは余り往来はなかった様子。大正年間に没している妹はタモツ。

本家に当たる実五郎氏は、現在、八福神酒造(株)の社長。五九郎丈は先代魯平氏（昭和十六年没）と親しかったので、郷里に帰省すると少年時代を偲んだ。好きならし寿司をとって貰い、必ず甘酒を所望したそうである。

また菩提寺の報恩寺に参詣、竹馬の友を招じ、大酒宴を催すのが何よりの楽しみであったらしい。

（現浅草寺大僧正・昭和三十八年十月発行の民俗雑誌より）

(ハ) 五九郎エピソード

○芸名五九郎の由来に二説

五九郎の芸名については、なにしろ「板垣死すとも自由は死せず」と不朽の名句を吐いて横死した板垣退助の書生に住みこんだほどの政治家志望（当時、壮士と呼んだ）五九郎だっただけに、諸説紛々だが、官憲圧力で、板垣家から五郎十郎一座に飛びこんだとき、一座の者から「政治活動、ほんとうにご苦労さまでした」とねぎらわれ、それをそのまま「五九郎」と芸名にしたというのが通説になっている。

一説には五九郎劇団独立のさい、先輩二人の名をとって「五十郎」としようとしたが、ちよつと遠



黒田一角氏の句を入れた灯籠

慮して「五九郎」としたというが、豪放な五九郎だけに、やはり通説のほうが正しいようだ。

○故大野伴睦と五九郎

故人となった自民党副総裁大野伴睦氏は、昭和三十八年七月八日、東京浅草公園奥山の五九郎顕彰碑クワ入れ式で「五九郎ら自由民権の壮士ありて日本の今日の政党が生まれたのだ」と大演説を行い、同年十一月五日の除幕式にも「大悲誓願」を述べた。こんどの鴨島建碑には君子未亡人が寄せ書きしている。

○フランキー塚と五九郎

フランキー塚は五九郎のまな弟子であり、そのお父さんの塚正高氏の養父は鴨島町出身。除幕式にはぜひフランキーを連れて参加したいといていたが、正高氏の病氣とフランキーの日程がとれず両氏は、日を改めて来町するが、皆さんにくれぐれもよろしくと手紙をよせている。

5、セメント、石油、アスファルトの開発 —— 寺田洪一 ——

寺田洪一は幼名、藤井熊太郎と称す。藤井分家後の当家二代、藤井嘉久蔵の長男として、慶応三年九月七日、麻植郡鴨島町喜来に於て、誕生す。（藤井寛太郎の実兄）



浅草に建てられた曾我廼家五九郎碑

成長するに及び、藤井洪一と姓名を改め、時勢の変遷と家運の衰微を挽回せんとして、志を立て、明治二十三年、単身故郷を後にして、東京に出て、同郷の先輩、近藤廉平氏の厚情を受け、後に浅野セメント株式会社の社員となる。その勤勉と手腕を買われ、漸次重用せられ、明治三十五年、社長浅野総一郎氏の息女、やす子と結婚した。

数年後、浅野家及び浅野総一郎夫人の出里、寺田家の懇情により、寺田家を相続した。

その後、浅野総一郎氏を代表して、新潟県に進出し、宝田石油株式会社専務、渡辺藤吉氏と協力して当時多数存在せる小規模の採掘業者及び製油業者を敏速に買収統合して、宝田石油株式会社を、日本石油株式会社を凌ぐ程の大会社にならしめた。この功績は、洪一氏の活躍に依るところであった。

明治四十年、米国・露国及びバルカン半島に於ける石油先進地を視察し、帰国後、南北石油会社を創立した。そして、世界最新の大規模なる工場を横浜平沼（現在の横浜駅付近）に建設して、日本の石油業界に新時代を造らんとせしが、同業者の妨害、日本政府の石油政策に対する朝令・暮改の変革、悪臭問題より来れる市民の反対等に会い、一大頓座を来せる結果、会社を日本石油株式会社に合併して後引退した。



寺田 洪一・やす子

その後、アスファルト製造事業の前途有望なるを看破し、アスファルト鉦区を大量買収すると共に、日本アスファルト株式会社を創立し、社長となり、大いに事業を拡張しつつある時、不幸にして脳溢血のため、この業界より引退療養するのやむなきに至れる。そして療養十年、大正六年六月五日、ついに不帰の人となられたるは、真に遺憾とするところである。若し洪一氏健在ならば、浅野系人物中、浅野聡一郎氏の事業を継承すべき手腕実力最適なりしに、真に惜しむべきであった。

※ 藤井熊太郎の庄家は「フジヤマカ」と号し、喜来「ヤマフジ」藤井家の分家である。実弟の藤井寛太郎氏は朝鮮で

干拓王と言われた人物で、その功績碑が喜来の杉尾神社境内に建てられている。兄弟そろって大事業をなした。

近藤廉平氏は、日本郵船の社長で、日露戦争中、政府へ運搬船を用立てた功によって、男爵に叙せられた人で本町西麻植の出身である。

6、朝鮮干拓王 —— 藤井寛太郎翁 ——

戦前、朝鮮に於て水利王、干拓王と称され、朝鮮農業を支える礎いすえとなって消ゆることなく、また、米作りの恩人として広く敬慕けいぼされていた藤井寛太郎翁は、父嘉久蔵、母志ん（三木申三氏の祖母の姉）の二男として、明治九年一月二十八日、麻植郡鴨島町喜来で生まれた。

大志を抱いて大阪へ出て、藤本合資会社に勤め、熊本支店長を経て、明治三十七年日露開戦と時を同じくして、年齢二十七才にして仁川に渡鮮し、同地にて同社の代表社員として米穀貿易に従事していた。たまたま商用にて、郡山、江景方面の米産地を知り、朝鮮農業の有望なるのを看取し、居を郡山に移

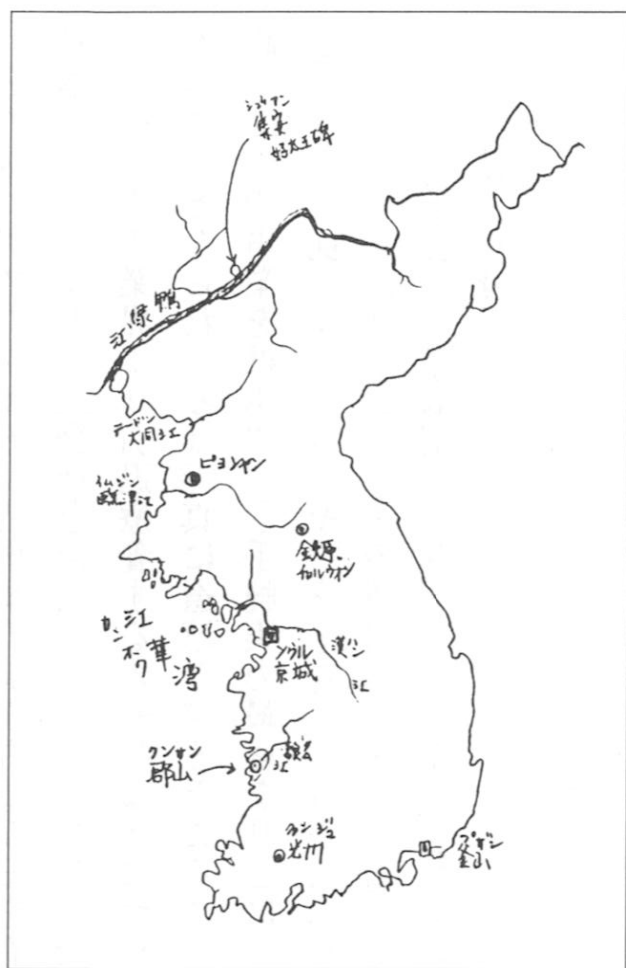
した。この時期に藤本合資会社は倒産したため、その後は独立して、錦江万項江の流域にある全北平野に、壹千五百町歩の土地を買い求め、全北沢溝郡五山面に農場事務所を構えて、農業経営を開始した。当時、朝鮮の農政は振わず、加うるに度重なる干害を受け、農村の疲弊甚だしく、農地は荒廢に帰する状態にあった。寛太郎翁は、この荒んだ状況を見て、これを改善するには、水利灌漑事業を起こすを先決だと考えた。

明治三十七年十月、大蔵省主税局長日賀田種太郎氏が、総督府財政顧問として来任された機会に、同氏に対し、朝鮮農業改善の急務を説き、水利かんがい事業を優先さすべきことを強調した。

日賀田顧問は、朝鮮財政の強化には、租税力の増強を必要とするので、その進言に共鳴し、直ちに総督府より調査費を支出せしめ、農商務省より専門技術員の派遣を乞うて、その調査を行わしめた。その有望なるを確かめ得た。

明治四十二年六月、臨時水利組合を設立して、翌四十三年に工事を起こし、全北黄登にある溜池の旧堤を復旧すると共に、更に十二キロはなれた山を切り開き、或は疎水トンネルやサイホンを通して、冬季間に上流の河川より水を導入して、四十平方キロの大貯水池を築造し、七千万立方メートルの水を貯水して、同水利組合の蒙利地三千五百町歩のかんがいをなすことに成功した。

朝鮮農業の草創期に於て、この近代的水利



施設の幕開けは、その後には於て朝鮮に大小無数の水利事業がおこったことは、業史上特筆すべきことである。

その後、大正六年、平北鴨緑江岸に大正水利組合を設立し、干拓事業を施行、水田五千町歩を造成した。続いて大正七年二月、全羅北道沃溝郡に於て、東西八キロ、南北約四キロの不二農村を造り、日本人移民三百三十戸の入植する計画を樹立して、日本人の集団移民のための新田を造った。ここにまた、面積三百五十町歩の貯水池と、七十二キロに及ぶ用水路を、干拓事業と共に大正十一年に完成した。

続いて江原道に於て、不二鉄原農場を開拓し、不毛地四千七百町歩を開墾、併せて中央水利組合を設立、大正十四年に総ての工事を完了し、会社名を不二興業株式会社と改め、取締役社長に就任した。

寛太郎翁は水利かんがい、干拓事業の外に、日本人農場として生産の改良に、或は小作人の保護に典型的施設を行っている。

翁の朝鮮農業に関する卓見と英断は、他の追従を許さざるものがあつた。大正十五年に「朝鮮産米増殖計画」が更新され、土地改良事業の促進のため、その代行機関として、「朝鮮土地改良株式会社」が創立された時、翁の知識経験が買われて、同社専務取締役となつて、大いに貢献するところがあつた。

しかし、人間活動の限界を越えた永年にわたる幾多の苦斗は、ついにその肉体を蝕み、高血圧に倒れた。



昭和3年11月16日 叙位記念写真
藤井寛太郎・智恵野・敏子・聡二郎

昭和十四年には米価が一石当り四十円から五十円となり、不二興業株式会社の米穀生産の増加と米価の高騰により、同社は全朝鮮第一の高収益の会社とまでいわれるに至った。

翁は神奈川県小田原市国府津に居を移し、静養に専念されていたが、幸い快方に向かった。

昭和十四年十月、中国に移り、天津に「藤井水利興業公司」を設立し、軍部の協力を得て、白河流域の農地八千町歩の開拓に着手した。事業は順調に進んだが、はからずも終戦となり、やむなく国府津に引揚げた。

ここでまた「不二農林株式会社」設立し、足柄山周辺五十町歩に粟の栽培をはじめたり、読書三昧に日を送ったが、昭和二十一年八月二日、ついに他界された。行年七十才であった。

藤井寛太郎翁が、朝鮮にのこされた事業は不滅であるが、翁に対する生前の恩賞は、大正四年、水利事業の功勞により功勞章を授けられ、大正八年農事改良と水利開墾に関する功績にて、勲六等瑞宝章を昭和三年十一月従六位に叙せられてはいるが、戦争等の諸般の事情により、翁の朝鮮に於ける国家的な偉功に対して、何等報ゆるところがなく、今日に至っている。

中央日韓協会及び友好協会は、その存立の意義により、今日の如く日韓修好の緊密を必要とする時、改めて翁の功勞に対し、論功を詮議し、朝鮮に於て活躍せる偉大なる功績に対し、改めて考慮すべきではないかと言及している。

翁が朝鮮に遺した数々の業績を想い、昭和四十九年、その功勞を頌する顕彰碑建設の話が起こり、神奈川県藤沢市在住の根岸喜一氏が中心となって、旧不二興業株式会社関係者、知合、縁者等、百六十三名の有志の浄財の寄進により、昭和五十年六月二十三日、藤井翁の生地、麻植郡鴨島町喜来の産土神、杉尾神社の境内に、顕彰碑が竣工し、除幕式が挙行されました。

その天書は大内枝翠先生の揮毫、碑文は猪原慥爾氏によって書かれている。

なお、遺族により副碑が建てられ、藤井翁の遺墨が刻まれております。

○不二興業株式会社各管理地面積

鉄原農場	四、七七二町歩
西鮮農場	四、一七五町歩
全北農場	一、八〇六町歩
沃溝農場	一、〇七八町歩
不二農場	三八町歩
郡山市街地	八五町歩
植林地	四、一四五町歩
合計	一六、〇九九町歩

○朝鮮の水利王の碑

治水勸農堤此身
 欲培国本幾酸辛
 願求知己千歳後
 初念貫通長不浅

鰲山 農夫 寛

この詩に、氏が農業は国本として自信と誇りをもっていたこと、農業、干拓に努力したことがわかる。鰲山と号したことは、干拓を生命とと思っていたことを、農夫寛と署名したことは、農業を愛し誇りをもっていたことがうかがえる。

文責 藤井 徳午郎



藤井寛太郎碑

7、コンクリート船の発明者 —— 武智正次郎 ——

上下島の西北部に、家号「かたせんだん」で知られている豪壮な邸宅を構えた武智家がある。これは、昭和十二年頃、武智正次郎氏が土木建設業で成功した頃に建てたものである。

正次郎氏は、この家がまだ草屋であった頃、武智源吉氏の長男として明治十年四月十八日に生まれた。氏は学業優秀であったので、明治三十年、徳島中学校を卒業し、同三十七年七月十三日には京都帝国大学理工学部土木科を卒業した。当時、京都帝大を出た工学士は県下で珍しいことであった。思考型の英才で寡黙な人であった。土木事業では多方面にわたって活躍し、成功を収めた。

この頃、名西・麻植郡には用水路がなく、水田耕作は川沿いの一部に限られていたので、麻名用水組合が組織された。氏は同組合の技師長として設計監督にあたられた。

つづいて、私鉄であった徳島鉄道株式会社の技師長として、社運の発展に貢献した。さらに徳島電気株式会社が設立されるや、氏は専務取締役として経営の基礎計画に参与し、会社の発展の基礎固めに貢献した。

大正四年に大阪に出て、浪速工務所を創設、事業は順調に進展し業界にめきめきと頭角をあらわした。その後、社名を武智工務店と改称した。この頃、氏はセメント材を発明し、専売特許を得た。これによって巨額の利益をあげ、大阪では富豪の名をほしいままにした。鴻池の邸宅を買い



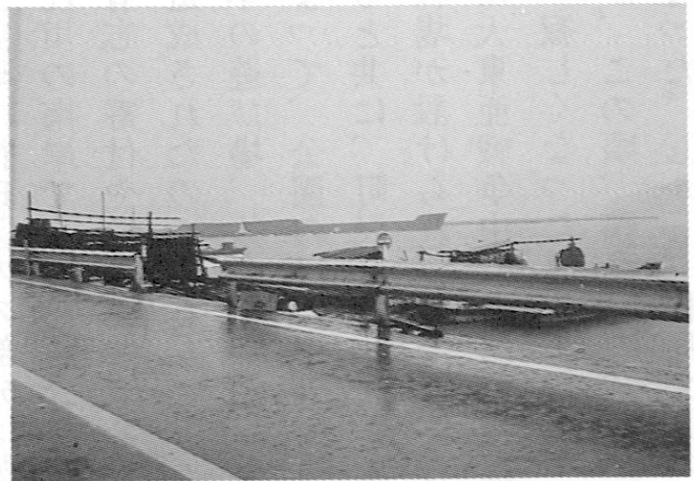
武 智 正次郎

取ったりし、大正十二年には、郷里の若宮神社に神殿の玉垣を寄付するなど、生まれ故郷のことも忘れぬ愛郷心をあわせ持っていた。翌十三年推されて衆議院議員選挙に鴨島から立候補したが、これは惜しくも落選した。

氏の事業が発展をつづけているうちに、第二次世界大戦が勃発した。戦況は次第に不利となり、輸送船が次々に撃沈され、造船資材も不足を来たし、造船工業が窮乏に追い込まれたとき、政府の指示を受けてコンクリート船の建造をはじめ、輸送に一役買った。戦争が終止符を打ったので、大量造船の生産には至らなかつたが、この発明によって氏はまた多大の収益を得るところとなった。

現在もコンクリート船の一隻は、武智丸と銘打って、広島県豊田郡安浦町三津口湾に記念として保存されている。かなり大きなもので、台風のときには防波に役立っているとのことである。

その後も、氏は土木建設を天職として活躍をつづけられたが、昭和三十年、惜しくも逝去した。七十歳であった。



湾頭 遥かに船体を見せる武智丸



武智丸内部

8、鴨島公園を寄付してくれた — 石油王 松村善蔵 —

鴨島の北辺を流れていた南吉野川（北川）は、昔から提防が築かれず、度々洪水が出て鴨島へ水害を与えて来た。（第一章 災害史参照）

明治四十年頃から、政府によって南吉野川の上流、お堰に築堤して流水を吉野川本流へ閉め出す工事が行われた。そして旧河川敷には堰堤下よりの伏流水を流す江川の小流をもつ広い地帯が出現した。これは大正二年のことである。そのうち鴨島町の行政区内の部分は鴨島町の土地となった。

昭和二年、この新しい町有地の中、江川の南岸で今の鴨島公園の部分に公園を創設しようとの議が起こり、鴨島公園保勝会が発足した。町有志の寄付や労力提供によって旧川原の荒地が整理され、松、桜等が多数植えられ公園としての基礎が造成されたのである。

昭和八年にはプールが建設され、夏季の遊び場、体育の場として利用されるようになった。昭和九年には、牛島村上浦出身の松村善蔵氏によって、公園のほぼ中央に、鴨島の生んだ名僧、大僧正泉智等師の銅像が建立され、公園に体裁を添えると共に、町民に誇りを与えることになった。

昭和十五年には、プールの南側に体練場が設けられ、町民の体育向上に利用されることになった。昭和十六年から昭和二十年まで続いた大東亜戦争中には国家非常時下、軍需物資回収の方針に従って、泉智等師の銅像までも町から供出され、寂しくなった思いがした。

大戦は昭和二十年八月十五日終わったが、この頃、鴨島町の財政は極度に窮乏していたので、止むなく鴨島公園敷地の広域を売却することになった。しかし、鴨島公園の敷地売却は、鴨島町が後に取り返え

しのつかない結果を生じると憂え、町内の有志、有識者数名は、前に泉智等師の銅像を公園に建立してくれた丸善石油株式会社社長、松村善蔵氏に諮って、昭和二十二年十二月二十七日、鴨島公園復旧費として十萬円の寄贈を受け、売却済の土地を買い戻してくれた。これによって、鴨島公園（第一中学運動場を含む）は、永久に保存することになり、鴨島公園は、町民のための行楽地として提供されたことを忘れてはならない。その後、国道に二つ分断された。

昭和四十六年五月、今度は松村善蔵氏の令息松村喜八郎氏に頼って高野山管長泉智等師の銅像を現在位置に再建して貰い、鴨島公園の体裁を再び取り戻した。

公園の西側は、年と共に整備され、行楽の地、憩いの場、体育の場、催しの場、公共施設の場として広く町民に利用せられ、鴨島町になくはならない地となっているが、松村氏の功績を語り断ぐ人は少ない。

戦後の不安混乱の時代に鴨島公園の土地が個人の手に渡っていたとすれば、今の鴨島公園はなかったであろう。これにつけても松村善蔵氏の功績の偉大さを思うと、町民として深い感謝が湧くのである。

9、東京計器(株)の創始

—— 和田嘉衡 ——

先ずお断りしておきますが、資料に乏しく、幼少の頃のお年寄りの言い伝えや實際等を取りまぜ、少しでもお役に立てばと書きました。その点ご寛容下さい。



松村善蔵碑

私の幼少の頃、当時鴨島尋常高等小学校長、金子尚二先生が、講堂に全学童を集め、和田様より革帯かわおびを全生徒に贈呈され、次のようなお話がありました。

和田様は鴨島小学校訓導として奉職され、不断の努力とまれに見る異例の持ち主で、日本の将来の動向、自己の進むべき百年の大計を見通され、親類縁者等より、当時ようやく三円五十銭を調達され、西も東も知らない東京に単身乗りこんだのでした。

高度の俊才を遺憾なく発揮され、精密な計器をつぎつぎ発案され、和田度量衡として不動の基盤を築かれたのでした。販売先は官民全国津々浦々に波及し、偉大なる功績を残されました。

一九三二年、東京都に合併された品川の一角（正四角の拡大な土地）を買占め、製作工場、研究室、社員の社宅等を内部に完備し、門は東西南北の四ヶ所設置されていました。そしてドイツ式の経営方針を採用され奮斗されました。

大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災が起こったが、幸なことに難を逃れました。

品川は昔、東海道の宿場町で水陸の要所として栄え、海に沿って弦歌さんざめく三味の音が絶えたことがなく、色街が軒を並べ、旅人や船人が沢山集っていた。この花柳界のすぐ裏は海で、小舟に乗った二人組が頭に手拭いをかぶり、新内流しや声色を客の注文に応じて演じ、長い竿の先端に網をつけ客のいる二階に差し出し、紙に包んだ祝儀を入れてもらった。この風情は日本独特で、外国では見られない光景でありました。

和田計器も戦時は軍部命令により、和田航空として飛行機の増産に心血を注ぎましたが、B29のたび重なる爆撃に完全に生産はとまり、焼土と化しました。

戦後の消息が途絶え残念に思いますが、かもしまふるさと研究会唯一の婦人お世話人で、孤軍奮斗さ
れている和田芳様が、東禅寺にあるお墓を守り供養されています。

○嘉衡氏後二つに分れた東京計器



和田社長

ニューヨーク大学航空科を卒業し、欧州各国の航空機工場をくまなく視察して帰った和田有史氏が終生打込める事業はこれだという意欲に燃え、巖父の東京計器製作所社長和田嘉衡氏から同社の航空計器部門をごっそりもらい、川崎の新工場に移したのが、日華事変の勃発で軍備拡充が本格化した昭和十二年であった。これが東京航空計器のはじまりである。それから航空計器の専門メーカーである同社が時代の波に乗ってふくれて行ったのはもちろんである。同十六年太平洋戦争の初めには軍監督工場に指定され、ただ技術を磨いて量産に努めていけば経理面でも営業面でも何の苦勞もない時が続いた。しかし、戦後また航空工業が復活し、雀の涙のような防衛庁需要ではさきに軍監督工場であったことがたたって経営陣は技術者の目白押しといった形。これでは経営的に欠陥があると新たに迎えられた畠中会長を入れ、九人の役員のうち事務系の者はわずかに二人。それでも川崎工場が米軍に接収されたが狛江に最新式の工場を建設、航空計器を主体に映写機、電気計算機にまで手をのばしてはいるが、戦後和田家のえんせきに当る橋井真氏に譲った東京計器とは犬猿の仲にあるとまっぴらな噂である。有史氏は、進歩的で常に夢をえがいているだけあって神経がこまかく、よく社員を叱るがその半面人情に厚く、家の子郎兄的に社員の面倒をよくみるという。親子代々奉職している社員が多いのもこのためらしい。

10、セメント業界の大黒柱 —— 松島清重(大阪セメント) ——

明治三十四年、鴨島二六二番地、松島藤吉氏二男として生まれる。藤吉氏が明治三十八年に砂糖販売店の開業を大阪ですることになり、一家は上阪した。従って、清重氏は四歳まで鴨島で育ったことになる。その後、氏は大阪の今宮中学校(旧制)、明治専門学校(現九州工大)を卒業し、東北大学工学部化学工業科(旧帝大)を大正十五年に卒業した。

氏がセメント業界に入るきっかけは、この時であった。律儀な氏は、母校の明治専門学校の恩師、栗原鑑司教授に無事卒業の知らせをしていた。その返事に「〇月〇日〇時に戸畑へ来い」という手紙がきた。栗原教授と豊国セメント柁原専務との間で氏の同社入りが決定されていたのである。

その後、氏は日東セメントの技師長に招かれたが、大阪窯業セメント谷口専務と顔なじみになり、同社入りする。そして、同社の満州撫順の新工場進出のため、機械設計、工場建設に取り組み、撫順セメントを起こした。その後、諸事情があり、日本へ帰って、戦後の昭和二十六年本社社長を就任する。激動期の同社発展の基盤を近代的に整備、不動にした。この外、土佐石灰工業(株)、大阪生コン(株)の社長も兼務し、日本セメント技術協会会長の任を長年務められ、昭和四十七年に勲二等瑞宝章を受章されている。西宮市在住。

11、黄銅界の重鎮

松浦貞勝



松浦貞勝

上下島の中心に大辻という地があつて、延享四年に建立された庚申塔が祀られている。この西近くに地盤の小高い家を構えた松浦家がある。貞勝氏は、この家で明治四十三年、松浦惣吉氏の長男として生まれた。氏は幼時より体格がよく、もの静かで、どっしりしていた。家では農業の手伝いなどとして、よく働いた。

松浦家は小農であつたが、氏の叔父の延蔵氏も、寿一氏も、ひとかどの実業家になつていた。氏は大正九年に鴨島尋常小学校を卒業すると、商業を志し、大阪へ出た。しかし、大阪へ出た人がよくかかる脚気をわずらい、足を引きずりながら故郷へ帰って静養した。元来、健康な氏は間もなく回復してきせるや灰皿の行商をしていたが、大正十三年十月、鴨島の筒井製糸株式会社に入社して煮繭や選繭の仕事に一生懸命汗を流したこともある。

昭和二年、徴兵年齢となり甲種合格して、砲兵隊に入り、訓練に耐えて上等兵となり帰省した。そして、再び筒井製糸株式会社に復職した。

当時の筒井製糸は合理経営をしており、関西の模範工場といわれ、多くの製糸家が没落していく中でも、極だった経営をつづけていた。氏はこの間に筒井製糸の方針である節約・努力・忍耐を身につけた。昭和十年、大阪で松浦伸銅所を経営していた叔父、松浦寿一から招かれたので、筒井製糸を辞めて再び上阪、叔父の会社で勤めることになった。また、日本航空機材株式会社の設立に協力したので、ここ

でも重要な地位を得た。

昭和十六年、第二次世界大戦が勃発したが、軍事関係の事業にたずさわっていたので、召集は後回しになっていたものの、戦争も末期になった昭和二十年三月十二日、ついに召集令状を受け、四国防衛軍として高知で砲兵陣地の構築に従事した。

昭和二十年八月十五日、戦争が終わったので、氏は八月二十二日に大阪へ復員したが、大阪は戦火で灰燼に帰し、商売をするにも手のつけようがなかった。しかし、氏の慧眼は焼け跡に残る古銅や古鉄にあった。これを回収することを思いつき、さっそく自転車で回って、ただ同様に買い集め、金属資材の乏しい当時に収益をあげ、業界得活への先鞭となった。特に古銅は、黄銅製造に役立つのでよく売れた。そして、氏は古銅回収から黄銅販売に転じた。事業はますます発展をつづけ、ついに四国黄銅株式会社を設立して社長となった。今では、大阪黄銅品販売業協会の元締めとなっている。

成功した氏は、郷里のことを忘れず、上下島の警鐘台、消防用井戸二ヶ所、上下島の神社等に寄付している。

昭和五十一年、鴨島小学校創立百周年記念の事業が行われると聞くと、筆頭多額の寄付をして母校に報いた。氏が小より身を立て努力を重ね、今日の大成功を収めたことは、一門の幸福や誇りとなったことはもちろんであるが、郷里の者も氏を誇りに思い、若い人には奮発心を喚起したい。

第三節 近隣出身の先覚者

(1) 芳川 顕正（一八四一—一九二〇）

天正十二年（一八四一）十二月十日、川田村で生まれ、幼名「賢吉」といった。明治十五年、東京府知事、同十九年内務次官、同二十三年、時の山県総理大臣は「教育刺語」の草案の重任を伯に求められた。そして伯の文部大臣時、同年十月三十日に明治天皇が發布した。

その後伯は司法、内務、通信各大臣を歴任、同四十五年枢密院副議長になった。蜂須賀茂昭侯とともに新政府の要人として活躍した。郷土の三代目川真田徳三郎、近藤廉平氏は伯と深いつながりをもって、東京で活躍している。大正九年一月九日没。

(2) 須見 千次郎（一八四六—一九二七）

弘化二年、美馬郡舞中島、住友恵市次男として生まれ、須見徳平の養子となり、東京帝国大学卒業後、帰省し、養父の精藍業を継ぐかたわら、阿波紡績、毎日新聞、阿波製糸、八九銀行等の取締役を歴任、県議を経て、衆議院議員に当選。

(3) 近藤 廉平（一八四八—一九二二）

嘉永元年、西麻植に生まれる。明治二年、二十二才で上京。大学南校（のち慶応大学）に学ぶ。岩崎弥太郎（三菱財閥の創始者）に知られ、三菱に入社。横浜支店長、副社長を経て、日本郵船の創立で社長に就任する。後、男爵、貴族院議員に当選。

(4) 石原 六郎 (一八七三〜一九三二)

明治六年、飯尾生まれ。阿波藍商であり、三十六年ドイツと特約、人造藍を販売。大正四年、呉郷文庫及び育英資金を設立し郷土に貢献。

(5) 工藤 茂三郎 (一八五四〜一九二三)

安政元年、飯尾に生まれる。理学・天文学を独修し、明治三十年、中陽暦を発表する。長男隆治も東京帝大を卒業後、徳島市長を務めたが父の中陽暦の研究を継ぐ。

(6) 藤井 真信 (一八八五〜一九三五)

明治十八年、牛島村に生まれる。東京帝国大学卒業後、公文合格。明治四十五年、欧渡。大蔵省、参事官、主税局長、主計局長・次官を経て大蔵大臣となるが、五十才で屈す。

(7) 岡田 勢一 (一八九〇〜一九七二)

明治二十五年、牛島村生まれ、十三才で上阪。苦学して、大阪造船学校を卒業し、サルベージ業、海運業を興こし、諸外国との貿易で巨額の富を得る。衆議院議員五回当選。昭和二十三年、芦田内閣で運輸大臣となる。渭北中学(城北高校)を設置寄付や牛島小、医専、師範学校への巨額寄付を贈る。

(8) 阿部 邦一 (一八九三〜一九五五)

明治二十六年、牛島に生まれる。東京帝国大学を卒業後、昭和十年より欧米留学。兵庫、秋田、三重、愛媛、長崎、愛知県の部課長を歴任。昭和二十六年、徳島県知事となる。

(9) 堀江 邑一 (一八九六〜)

明治二十九年、知恵島に生まれる。京都帝国大学卒業後、欧米留学。東京都教育委員、日ソ親善協会副会長を就任。専門、経済学。

(10) 松村善藏（一八八六〜一九六一）

明治十九年、上浦に生まれる。十六才で上阪。西村商店に勤務、石油部を創設。明治四十三年、丸善石油株式会社を創立した。本町に鴨島公園を寄付する。

(11) 松村宇平（一八九〇〜一九六九）

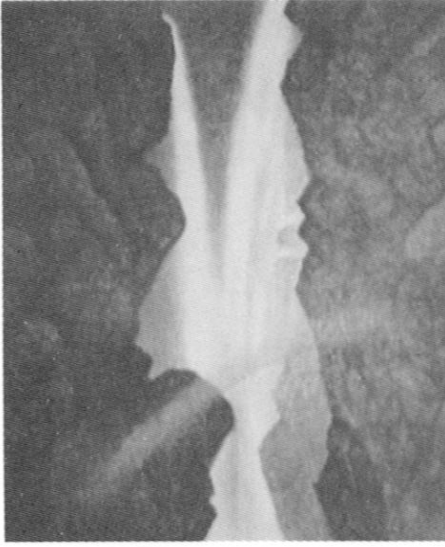
明治二十三年生まれ。善藏氏の弟である。スタンダード石油販売に従事。兄とともに丸善石油を創立。販売会社部門を担当する。

(12) 堀江薫雄（一九〇三〜）

明治三十六年、知恵島に生まれる。東京帝国大学卒業後、横浜銀行に入社。昭和三十二年東京銀行頭取となる。世界経済交流協会会長など歴任し、貿易界に活躍中。

(13) 林雲谿（一九〇三〜）

明治三十六年、中島に生まれる。南宗画の研究を重ね、日本南画会会長となる。鴨島中央公民館、藤井寺など氏の郷土に対する作品は数多く有る。



林雲谿の画

第十九章

鴨島に名を残した人々

鴨島の人物誌 その2

せられ、陸軍歩兵中尉に任ぜられた。そして、明治の末頃には、帝国軍人在郷軍人鴨島分会長に選ばれ、鴨島にいる予備兵や後備兵、未教育兵の教育訓練に当ることになった。

家では八ヘクタールの小作地を管理するかたわら、農作人を雇って一ヘクタールの農地の経営をした。作物は麦作と藍作が主であった。後には藍葉を寝かせてすくも造りも行っていた。明治末頃からは養蚕の方針を立て、広い桑園を作り、二練の養蚕室を建てて養蚕を始め、後には繭の乾燥業も行っていた。

大正四年、郡会議員の任につき、大正八年にも再選され、政界に一步を踏出した。昭和四年には県議会議員に選ばれ、昭和六年、昭和十年と続いて選ばれ、県政に活躍した。

昭和十年からは、漬物製造をも始めたり、南前の広い畑には、ぶどうを植え農業に新機軸を開いた。

英一の演説は雄弁であった。音量豊かで説くところ明快、抑揚おさやうをつけ感情を含めた話振りは聴く者に感激を与えた。農業では常に考案して新産業にいどんだが、昭和二十一年七月二十八日逝去せられた。豊かな学識と行動力を備えた氏は、家業を栄えさせたばかりでなく、公務にも励み一世の雄として尊敬されている。

2、大商人ひょうたんや —— 初代 鈴木長三郎 ——

鴨島で「ひょうたんや」といえば、知らぬ人はない。ひょうたんやの実の屋号は山城屋であるが、俗称（商号）のひょうたんやで通っている。

山城屋は明治から続いた老舗らひせであったが、昭和二十二年三月二十五日の鴨島大火で焼失し、昔の姿を見ることは出来ない。焼失前の山城屋は、間口が二十メートルもある木造二階建の店と南向きの倉庫、

そして裏に裏座敷と土蔵を建てていた大店舗であった。店には広い帳場があって、呉服物、鍋釜、農具、米、醤油、塩、食油、石油、ランプ、灯心から葬用品に至るまで揃え、日用雑貨、荒物など生活用品にない物はなかった。一時は繭の買入れから生糸の「座繰」までも手をひろげ、することすべて当って繁昌を続けた。

明治末頃、二代目長三郎を養子に迎え、親子協力して店を経営し、県下にその名をとどろかせた。

この大店舗を築き上げたのは、初代長三郎である。この人は中島の三木田家から麻植塚の鈴木家へ明治三十年頃、養子に來た。商業の好きな長三郎は明治三十五年頃、今の元町に小店を開き、自ら荷車を引いて徳島から高品を仕入れて運搬した。道の悪い旧県道には鮎喰川の土手、鳥坂の坂道、市瀬の土手があった、大層苦労したといわれている。

鴨島に物資が整っていなかった当時のことである。仕入れた品物は直ぐ売れ、翌日は仕入れるほどの売れ行きで、店は相当繁昌した。その頃、大店舗を建築すると共に、夫人を徳島中島田の宮本家から迎えた。

明治の末頃、阿川の持部鉦山や広石鉦山が採掘を始めた時、いちはやく長三郎は鉦山へ食品や日用品を売り込んだ。ところが、大正に入り鉦業は一時衰えた。他の商人は物資の納入をひかえたが、長三郎は鉦山に出資し、鉦山を再興させた。それで鉦山の人や山の人々は長三郎に感謝し、買い物は全て山城屋へ来るようになり、益々商況は躍進した。

長三郎が店員に語っていたことは「品物の値が上った時は他店より後から上げ、値が下った時は他店より先に下げる」と。このような商法をとったので、店の信用を高め、客はどんどん増えたといわれる。長三郎は温和で、よく気がつき、忍耐強く、人ざわりがよかったので、何となく客を引きつける魅力があった。また、ウタ夫人は美貌で、上品で、客扱いも親切であった。この夫婦のコンビは客に好感を与

え、町内外よりの客は親しみの気持ちで買物に来た。

阿川から山城屋へ買物に来た人は言っている。「遠い山道を割り木や木炭を担いで鴨島へ来て、やつと荷をさばき、山城屋へくると、仁平さんや奥様が『まあ奥へお通りなして』と言って、裏座敷へ通してくれ、湯茶や食事まで接待してくれた。ほんまに生き返ったように思った」と。山からの客がくつろいだところで、買物をしてもらうという長三郎の心遣いに感謝しながら、買物をしたそうだ。もちろん、予定よりも多く買ったことだろう。こうして山の客をも得意先にし、店は益々栄えた。

昭和に入ると、山城屋は店専属のトラックをやとったり、貨物汽車を借り切って品物を仕入れるほどになった。長三郎は県下で有数の収入を得るようになり、多額納税者として貴族院議員に選ばれる資格を得るほどになったが、昭和十一年十二月十三日惜しくも亡くなった。葬式は鴨島公園に設けられた葬儀場で行われ、立派な葬輦そうれんを白衣を着けた親類が担ぎ、多くの人が葬輦そうれんにつけた白紐ひもを握って続いた。また、その当時は珍しかった花輪が山城屋から葬儀場まで並び、町内外から沢山の会葬者が参列した。故人の徳を偲ぶに足る大葬儀であるといわれている。

3、「髭ひげさん」——川真田治助——

大西本通りに、お裏、本家、中、お西、大西と呼ばれる大邸宅が立ち並び、藍商として活躍した鹿島屋一族の面影が忍ばれる。

本家の現当主は聖郎氏であるが、第八章で述べたとおり、次々に分家を起こした。味噌屋は最初の分家で、大きな製造工場と店舗があつて、最近まで残されていた。

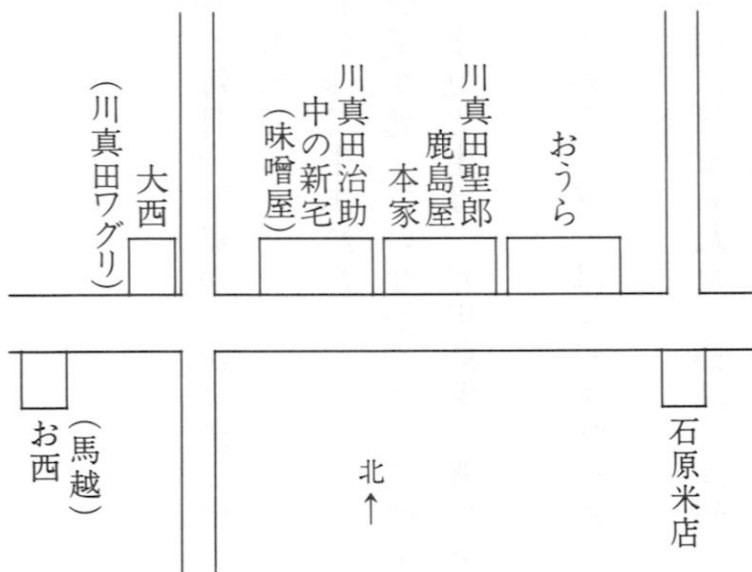
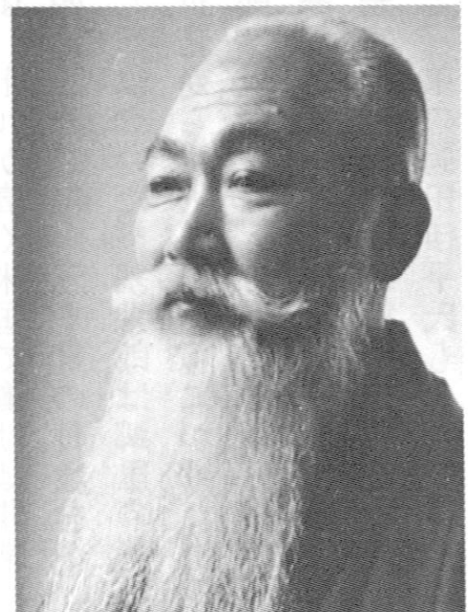
川真田治助氏は、鹿島屋味噌屋の長男として生まれ、家業を継ぎ、味噌、醤油の製造販売の経営に手腕をみせ、県下でも有数の位置にあった。多くの作業者が毎日働いていたことを記憶している。

髭さんで親しまれた治助氏は、中の新宅で、社会奉仕の念厚く、夏期は店頭にて麦茶を接待し、水槽に金魚を放して楽しませてくれた。また精米所の土間には、机と長椅子を置き、大阪毎日、徳島日々新聞を展示して、通行人の憩いの場に供していた。当時は新聞購読家庭の少ない時代であったので、ニュースを求める人が集まっていた。

氏は自分も陸軍曹長であったため、応召員の送迎には、軍服を着用して出ていたことや遺族に金一封を贈ったりした。上海事変には自分の賜金二四四円を献金したり、その後の戦争の応召員の各家庭へ豆腐を贈ったり、西瓜を贈ったりして、軍国美談として語られていた。

ご自慢の黒髭も、晩年には白髭となったが「白ひげのひげさん」と慕われていた。

広大な工場兼店舗、精米所も、今は姿を消したが、一部は香川県の四国村で保存されている。治助氏の長男は省三氏で、川魚釣りに熱心であったので「鮎釣りの鹿島屋はん」といわれていたが、これも髭さんの別名であった。



4、鉄道の父 —— 日野基太郎 ——

明治の末頃から昭和初め頃まで、判任官の鉄道制服で堂々とした人が、毎日上下島から鴨島駅に出て、徳島駅前の西部鉄道管理局徳島出張所へ通勤していた。この人が日野基太郎である。

基太郎は、明治四年上下島村の元庄屋で「上力」の屋号で知られる日野家で生まれた。

明治二十六年に鴨島では初めて徳島中学校を卒業した。この当時は鉄道が通じていなかったので通学は歩いて往復したり、徳島常三島の里見佐平先生の塾に泊ったりした。里見先生は、元川島警察署長を勤めた人であるが、篤学の士で青年の育英に熱心であった。

基太郎は中学を出ると、鴨島牛島森山三村組合立高等小学校の教員を勤めた。後には脇町中学校の教員を勤めたこともあった。



日野基太郎

明治二十八年、一年志願として丸亀聯隊へ入隊し除隊後、陸軍歩兵少尉に任ぜられた。鴨島では初めての将校であった。その頃、ドルが高く米国で働けば非常に有利であった。基太郎は明治三十二年、三十日の日数をかけて、米國シャトルへ渡航し職についた。基太郎は郷里の青年を招きたいと思い、鴨島近辺から六人を呼び職につけた。その中でも上下島の杉山六郎は資金を貯えて帰国し、石井で公衆浴場を開き、その後は薬局とスーパーマーケットに発展している。また、上下島の若宮神社の社前に狛犬こまいぬの石像一對を寄進している岡田憲平氏と、弟の岡田伊平氏もシャトルで成

功した人である。しかし、明治三十四年郷里の母の病気が重いとの報を受けてやむなく帰国した。明治三十五年には、北海道に防寒衣料が不足していると聞くと、北海道十勝郡帯広へ二十日もかかって渡航し、衣料店を開いた。しかしこれも、明治三十七年日露戦争となり、基太郎は戦時召集を受けたので店を閉じて帰郷した。

基太郎は、後備歩兵第十二聯隊小隊長として、川村中尉の率いる鴨緑江軍に属していた。満州へ渡り首山堡の戦いから沙河の戦いに参加し、ロシア兵三千人を捕虜にするなどの戦功をあげ、陸軍歩兵中尉に昇任され従七位に叙せられた。明治三十八年には、後備歩兵第十一旅団機関砲隊長として、奉天の会戦に参加している。この当時ロシア軍は機関銃を使っていたが我が軍にはなかった。しかし、奉天の会戦で我が軍は大勝した。ロシア軍は退却をつづけ、明治三十八年十月には日露講和ができ戦争は終わった。基太郎は、多度津に凱旋して帰郷した。その頃、帝国在郷軍人会鴨島分会が設置され、基太郎は初代の分会長に選ばれている。

戦争より凱旋した基太郎は、この頃から鉄道勤務に入ったのであった。そもそも国鉄徳島線の前身である徳島鉄道株式会社は明治三十二年開設されたのであるが、明治三十九年四月に基太郎はこの会社の副社長、川真田徳三郎の推挙によって入社し、要職に就いたのである。

明治四十一年、徳島鉄道が国鉄に移管されると、基太郎は四月には技手に任ぜられた。九月には書記に、十二月には鉄道局書記に任ぜられた。この頃、徳島線の本部は西部鉄道管理局徳島出張所で、今のポツポツ街の東入口辺にあった。ここで基太郎は二十年間庶務主任として人事を担当した。この間に鴨島の多くの用員の採用を世話し感謝されている。

明治、大正の頃は職が少なく、鉄道は格好な職場であった。基太郎をたより採用を志願する青年は多かった。小卒の中年者でも小使や門衛として採用された人もあった。その頃、鉄道員の職階級には傭人、

雇員、判任官の段階があつて、誰も上進を願望したが高等官を望むのは夢であつた。基太郎は昭和三年鉄道局副参事に任ぜられ、高等官を給せられた。そしてその年二十二年間勤務した鉄道を退職した。

退職後、有志者より推されて町会議員に選ばれたが、永年勤めた鉄道生活から急に家庭生活に変わったためか、健康を害し昭和六年十月二十七日惜しくも逝去した。

基太郎は元来、温厚篤実で沈着な人であるが、一早く新教育を受けて渡来し、知識を深め、戦争に出るには胆力を強くし、鉄道に入ってから二十年間人事を扱つて、特に鴨島近辺からは多数の青年を鉄道に就職させ「鉄道の父」といわれた。

5、松浦製糸場を支えた —— 松浦タケ ——

鴨島八幡神社の玉垣は大正九年建立された。寄附者の中で松浦宗平が五間寄附けんしており、鴨島で屈指の資産家であつたことがわかる。松浦宗平の本名は松浦左右平である。宗平の家は、鴨島商店街に在る本郷郵便局の北向にあつて、瓦葺木造二階家で間口八間位の大構えであつた。

鴨島では明治四十年頃、佐渡製糸が喜来で製糸工場を開き、明治四十三年頃、筒井製糸が鴨島で製糸工場を開いた。その頃、松浦製糸も製糸業を始めた。

松浦製糸場は松浦安太郎が創めたもので、その子、左右平の代が最盛期であつた。商店街に面した松浦製糸の広い店の板間には繭が山のように積上げられているのをよく見た。製糸工場は店の北裏にあつて、繰糸工女六十人位と男従業者十人余を使つていた。宗平は、脇町中学校を卒業し、更に大阪の明星商業学校に入り、英語の修得に努力した。製糸業には熱心で自動索緒機を考案したこともある。大正八



松浦タケ

年頃には鴨島八幡神社の西辺に広い用地を取得して、麻植製糸工場を建設し、工員を増やして盛んに操業した。この工場敷地の入口は北にあって、門をくぐると右側に、木造二階建の事務所があった。そして左側には住宅があった。その南に瓦葺木造平家、間口二十間位の工場が東西の方向に建てられていた。

この松浦製糸場は安太郎、宗平の二代を通して繭の買入れ、工場の運営、生糸の輸出などの事業を順調に運営した。その蔭の力が安太郎の夫人、松浦タケであった。

タケは安政元年三月二日川島町学の旧家、明石龍藏の女として生まれ、長じて鴨島で呉服店を営んでいた松浦家へ養女として迎えられ、後に安太郎を婿として迎えた。大正五年頃のタケは細型のすらつとした体に、白がの混った髪をひきつめて結び、眼はやさしく輝いていた。談話は軽快で相手に好感をもたせ、てきぱきと片付けた。行動も軽快で外出する時は、敷島の煙草の袋をぽいと懐ふところに入れて出た。その当時、煙草を吸う婦人はごく少なかった。タケは談話の間合いに調子をつけるため使った。

タケは松浦製糸を支えるかたわら、京都より高級呉服を仕入れ、かばん万ややまかく角などの大家へ納めたり、飯尾辺で織った藍染緋を集めて徳島の店へ卸したりしていた。また、タケは仏教をあつく信じ、飯尾の報恩寺や石井の童学寺等へもよく寄附金も納めている。後の高野山管長泉智等師を早くより尊敬し、会うことも度々あった。師が京都の洛東山泉涌別院に座していた大正十一年には、その寺へ百円の寄付をしたことがある。

タケは旧家の出という誇りと真言信仰によって得た豊かな心情と、優れた才智をもって、松浦製糸の運営に大きな力となって、全盛時代を築き上げた。まさに鴨島製糸業界の女傑と言ってよい。

昭和四年九月一日生涯を閉じ、飯尾の報恩寺の墓地に眠っている。

第二節 芸術関係

1、絵筆を揮った大家たち

西条竹重・泉 智等

筒井サイ・小原ハチ子

ふるさと鴨島に絵を描いて天職とし、また趣味として名をあげた人はないか、と調べてみたが、その中で三、四の有名人がいたので次に記してみることにした。

阿波画人伝によると、数少ない鴨島町出身の画家の中で、西条竹重があった。竹里は徳住寺住職・藤井等現の子として、元治元年九月十日に喜来で生まれ、のちに板野郡松島の光源寺住職・西条良正の嗣子となり、鳥羽雲明の画風を学び、のちに京都に出て技を磨き、さらに南宗家の大家・田所竹邨の門人となり麗筆を揮われたが、大正七年十一月、六十五歳で没した。

鴨島町殿郷の出身で、花柵伊兵衛の五男として嘉永二年正月十二日に生まれた泉智等大僧正は、学徳ともにすぐれた名僧であったが、一面、書をかき、絵をよくし、詩を作り、和歌も詠ぜられた。とくに絵は、仏教界で橋本独山、大谷句仏とならんで有名であった。それ故、大僧正に揮毫を依頼するものも

多く、書齋には色紙や短冊、扇子、書箋がいつも山のようにならまわっていて、興至れば二、三時間の間に半折七、八十枚を苦もなく揮毫されたといわれている。

大僧正が遷化された昭和三年の春、郷里の花柵家へ帰られた際、町内有志をはじめ多数の人びとが参集している席上で、随員が墨をすり、筆硯を用意すると、表客間の四枚つづきの襖に一气呵成かせいに老松を描きあげ、なみいる人びとを驚歎させたといわれ、花柵家では今もそのまま家宝として所蔵されている。また、大僧正には名僧として、かずかずの秘話が伝えられているが、そのひとつに北海道へ巡教に出かけられたことであるが、大僧正が入浴された湯がいつもきれいで、少しもよごれていなかったからしく、それは信者らがお風呂の水を勿体ない、ありがたい水であると、瓶を携えてきて、各自が家に持ち帰り、家族で飲んだらしく、それを知っていた大僧正は、ことさらに湯を汚さないように配慮されていたとのことであった。また、花柵家では昔からご飯に汁かけをすることを禁じていたらしく、たまに随行された花柵筆太郎（のち鴨島町長）が北海道の旅先で、白いご飯に汁をかけたのをいさされ、大変おいしかったが、年を経て、それがカレーだったことが判ったと家族に話していたとのこと、大僧正をおもてなしするため、当時としては特別な食事を差し上げたことを知ることができるといえる。

次に、大二次世界大戦中、筒井製糸の専務だった筒井源吾夫人・サイという人が、本格派の画家であったことは案外知られていない。この人は香川県木田郡上田村（現在は高松に編入）出身で、生家は松平藩おかかえの儒者の家柄であるが、明治の末期、東京・上野の美術学校に学び、のち大阪の南宗画家大橋香陵について研さんにつとめ、花洲と号して活躍されていたが、筒井家に嫁がれてからは家庭夫人となった。今も同家には名作が所蔵されている。大戦中、大阪で罹災した大橋香陵が、一時、同家に寄寓されていたのは、こうしたことによるものである。

大橋香陵は広島県出身で、岡山出身の南宗画家・石井金陵の門下生となり、師の没後、新しく師匠に

つくことなく、帝展、その他著名な展覧会にも出品することなく、生涯を独身で、ひたすら絵筆を執りつづけた風変わりな画家で、鴨島在住十余年間に描いた名作が、町内の愛好家によって数多く所蔵されている。

次に、第二次世界大戦後、およそ二十年間、鴨島に在住した小原ハチ子は、戦前に大阪で美人画を学び、のち京都・大徳寺芳春院に寄寓して史園と号し、彩管をふるって同院のため財政援助をされた。多芸者で長唄・三味をよくし、さらに華道家として鴨島の地に桑原専慶流を残した。

2、菊作りの名人 —— 佐尾山忠作 ——

「菊の忠さん」といえば、鴨島で知らぬ人はない。この人が佐尾山忠作で、鴨島の菊の蔭の力となりひいては鴨島発展に偉功をたてた。

忠作は、森山村森藤の出身で大正十年頃、筒井製糸へ入社した。大正十三年、会社の工女の慰みに菊を栽培しようとした時、忠作が技能を認められ、菊作りに専念するようになった。そして菊の品評会や菊人形は他県まで知られるようになった。昭和二年から本郷の菊遊座で菊の品評会や菊人形が開かれるようになったが、菊作りの指導は忠作が担当した。菊遊座は昭和十六年大戦勃発で中止した。戦争は昭和二十年日本の敗戦で終わった。

昭和二十四年、岡本勝次郎は、喜来に菊友座を開いて、菊の品評会と菊人形を復興し、次第に発展して県内外より多数の観客を集めるようになった。この菊友座の菊も忠作の努力に負うことが多かった。忠作は老後は菊作りをやめて静かに暮らしていたが、昭和五十八年九十歳で世を去った。

3、写真師のはじまり — 田村三十郎 —



田村三十郎

明治三十年頃、元町の南側で田村三十郎が鴨島で初めて写真屋を開き、店前に数枚の写真をはってあった。この頃は写真を撮ると、寿命が短くなると言っていて、写真を撮る人は少なかった。それでも大家で子供の誕生記念や学校の卒業記念などに撮る人があった。また、日露戦争の時、子供の写真をとって戦場の夫へ送る人もあった。明治末頃になると、持部鉦山や高越鉦山や筒井製糸へ出張して撮影することもあった。三十郎が亡くなると、妻のヨシノが写真業を続けていた。尚、三十郎はどこで写真技術を習ったかわからないが、器用で習得したようである。

4、歌舞伎の名人 — 江戸武律三 —

大正初頃、喜来に江戸武の律さんといって歌舞伎芝居の名人がいた。江戸武律三である。律三は喜来南部の江戸武家に明治三十二年頃生まれた。律三の家は農家であったが藍商もしてきた。父は歌舞伎演芸が好きであったので、律三も見る中に好きになり、次第に上達していた。西喜来の「かねます」や「やまと」の若人らと共に江戸武座を組んで、歌舞伎の衣裳や持物から襖、引幕など備えて神社などに舞台

をつくって朝顔日記、太閤記、熊谷陣屋の段、阿波鳴門など上演した。

大正七年頃、上下島で野木隆輔が浄瑠璃を教えていたが、これが動機となって上下島の乾益太郎が村の十四、五才位の子供を集め、歌舞伎芝居を教えた。この時、律三も馳せ参じて益太郎を助けて演芸を子供に教えた。子供は上達して若宮八幡神社の庭や民家の広い庭に舞台を設けて上演し村人を喜ばせた。後に律三は父の業を断いで、藍の商いで九州まで売り込みに行ったこともあり、養蚕が盛んな時は生繭を買集めて戸田の乾燥場で乾燥し、石井の生田生糸などへ売っていた。

律三は美男子で人々から好かれた。若い時は芝居に熱中し、後には実業に励んだが昭和二年、四十八歳の若さで世を去った。

5、芝居客席の取締り ——— 大西宇蔵 ———

大正の頃、芝居に行った子供なら鬼役の宇やんうやんを知らぬ人はない。昭和十二年、文化座が開かれるまで、芝居は北八幡の鴨島墓地の東側の畑に、広い掛け小屋をたてて行われた。舞台の前に柵席があつて、その後に追い込みという子供席があり、その後に柵があつて、柵席を買わない人は柵の外に立って観覧した。柵の中央に通路を設け、この通路に縄を張って、人の出入りを取締っていたのが宇蔵であつた。子供は入場料はとられなかつたが、子供席へ入るには縄引きの宇蔵の許しが必要であつた。宇蔵は顔付きが厳しく、声もどすがきき、取締りも厳しかったが、混雑しないようによく整理してくれた。感謝と恐れの気持ちで「鬼役の宇やん」といった。宇蔵は阿波町上喜来の生まれであるが、若い時に本郷のかほ万に勤め、後に農業を営んでいた。芝居が開かれると客席の取締りに来ていたのである。宇蔵は、昭和十

六年八十一歳で他界した。

6、寺小屋の師 —— 菊川消雲師 ——

昭和三十年秋、九十二歳の長寿を保って、逝かれた私宅近くの住友為吉氏が、日頃よく洩らしていたことである。

「消雲さんにはようどなられた。特に声が大きいのので飛び上った程だった。然し、子供ながら慕うてここへ通った。こんにち云う勉強であるが、当時学校というものがなかったので、お寺の本堂の片隅で教わった。仮名や漢字の読み、書き方、その意味、また使い方など……。」

女ともだちもいた。

寺のすぐ前の住友シナ、為吉氏宅裏の寺井ワコも、そして近在の子供達といっても男が多かったが、これら幼童、悪小僧どもに、消雲先生は読み書きの他に、しっけ躰しっけというか行儀作法など、そして昔の偉い人の出世話をしてくれたのを覚えていと。

何才から何才までという規定はないので、来たいときに来、辞めたいときに辞めている。十人位の人数が、いつも出入りしていたと。

「明治九年五月、消雲師の妻が死亡したことも一因だが、同十年、祖父真空師が寺の本堂を建てかえよう、その古材を使って庫裡を建てようとして、本堂のとり壊し工事が始まったのと相重なり、消雲師は寺を出て行った……と、昭和九年一月、九十五才で逝去されたハギノ祖母は語ってくれている。

従って、寺小屋はこの時期で終止した。この寺小屋のそもその始めについては、だれも知らないま

まである。

この時期すでに学制がしかれ、鴨島に小学校ができ、四年で卒業すると乗島にあった、牛島、森山、鴨島三村共立の高等科へ前記三者がそろって通学したところ、消雲師は、喜来の蔦谷菊蔵―昭和十三年九月、九十四才で逝去―氏とともに、先生として迎えられていたと云う。

当時使った三村校の教科書だった薄っぺらな黄表紙木版刷りのもの一冊と、教師に命ずるとの辞令書一枚と、当家の蔵書の中にあつたのを私は覚えていゝる。大事にしておこうと大事がすぎてどこへしまつたか、今さがしても見当らないのがまことに残念です。

消雲師は文政十二年生まれ、常教寺第十一代教証法師後妻（瀬部円行寺より嫁す）の子。

第十代春嶺法師は漢学に特に優れ、漢籍の今に蔵するもの何十冊とある。四書、五経が主であるが、論語や孟子には悉くに朱点を加えられていて、読破されたあとが見られる。

教証法師は讃岐より養子にこられたものであるが、また同じく学深く、殊に書道に造詣あつて達筆だつた。

消雲法師は、この二代の感化を幼童の頃から十二分にうけ、長ずるに従い、尚、いよいよ、よく大成された。

更に教証法師は、僧侶として欠ぐことのできない、読経の前後に誦（ジュ）する声明（シヨウミヨウ）に優れていたもので、この習礼をうけ、加うるに天来の明快流暢の音声（オンジヨウ）と相まって、唄師（バイシ、声明の先生という意）と敬仰され、近郊近在の僧侶のひとしく感嘆し、その習礼や教示を乞うものの数知れずのことだつた。

法師は墨痕あざやかに声明集を書き写し、その上、丁寧に朱点で符号を入れて門下生に渡している。

（注） 当時声明集の印刷物はなかつた。

中でも川田西福寺の藤野井得忍老師、山路善正寺の西通敬壺師はぬきんでいて、音吐朗々、その小節に至っては更に妙々だったと記憶しているし、またこの方々にお逢いした際、消雲師の話が出、この習礼の模様を面白くおかしく昔物語として、よく承ったことである。

声明集はなお大切に保存していると云われていた。寺にも一部ある。

ハギノ祖母は、教証法師後妻と同郷瀬部の明照寺から嫁がれたものであるが、色々とその一代の昔物語を私に話された。その一端を書こう。

嫁入りしたとき籠かごにのつてきたと。

その当時この寺は非常に格式ばっていて、たとえば門徒の仏事に出かけるときなど、寺男の腰に一本脇差しを差さしめ、法衣袈裟を大きな柳行季に入れて背に負わし、役僧一人つれて行ったとか。また葬儀の際は曲（キョクロク）、大日傘、木靴履きといった有様。他は略するが、寺内は銀杏の大木生い茂り、池あり築山あり、時に一日酒をくみ交して談笑していたとも。

一事が万事推してしるべきである。

明治四十四年五月、七十二才で死没した祖父真空法師は、この事態に反転、質素を旨とし、農耕を励み、家計の荒れていたのを建て直そうと節検力行にこれつとめた。

こうした生活様式の変転は、消雲法師と、とかく相容れなかったようである。

そうして、ただ実直、高士の面影のみを残された消雲法師は、男子供二人とも別れ離れて、晩年松島スエさんと暮っていたようで、明治三十六年十一月十五日、七十二才でその生涯をとじられた。

愛蔵、竹林七賢人を画いた二枚折り屏風一双が残っていて、何かを物語っているようである。

第三節 名工 関係

1、宮 大 工 —— 渡辺莊吉 ——



渡 辺 莊 吉

上下島若宮八幡神社の鳥居の内側に、大きな百度石が立てられ、寄進者は渡辺莊吉と刻まれている。莊吉は宮大工の「しきやう莊ださん」といわれた。

莊吉は嘉永六年六月上下島の大北に生まれ、若い時から大工を習い、後には優秀な「とうりやう棟梁」となり、自ら藤原兼安と称した。明治三十六年には、上下島の若宮八幡神社を建て上げ彫刻も莊吉がしたといわれている。莊吉は、明治時代としては珍らしく洋風の寄せ棟の建築も行い、自宅をはじめ男爵

近藤廉平の生家近衛家の寄せ棟も建築した。

また、脇町専売局の建築にも手下十数名を使って参加した。その当時、二十人以上の手下を使う棟梁は、ピストルを持つことを許されたので、この工事の時は莊吉もピストルを携えたといわれている。その他、麻名用水の架橋工事や鉄道の橋梁下の堀り割り工事をも行った。

莊吉は性格が剛直で所信を断行した。技術が確実で仕上りは堅牢であった。弟子に対しては厳格で、特に大工道具などの置き場、置き方については厳重であった。莊吉は昭和二十五年十一月二十六日、八

十八才で生涯を閉じた。

2、北^{かねま}方の豪邸を建てた

吉坂由太郎



吉坂由太郎(向かって左)

鴨島の藍商方は、明治二十三年、川真田徳三郎が衆議院議員に選ばれ繁栄していた。明治三十三年頃、徳三郎は豪華な邸宅を建てたいと思い、優秀な大工を広く捜し、三島村小島の吉坂由太郎を最適當者として鴨島へ招いた。

由太郎は、建築設計をして、特製瓦や優良木材や金具を集めにかかり、明治三十六年には建築にかかったが、明治三十七年日露戦争が起こったので工事を一時中止し、明治三十八年戦争が終ると再び工事にかかり、同年中に仕上げた。この建築で「間に取りつけた彫刻は由太郎が自ら彫ったものである。この建物は県下で最も豪華なもので「万の御殿」といわれて世に知られた。由太郎は万の建築で、秘法をぬすまれるのを恐れて、切り組みの材木には符丁を附けないで組合わせをしたとのことである。

由太郎の養父、清一郎も建築業に秀でていて、建築はもとより彫刻から漆塗りの研ぎ出しまでよく出た。由太郎はこの清一郎について建築の習得をしたのである。

由太郎は鴨島に住みついて建築業をしていたが、昭和二十六年三月二十一日、八十三才で他界した。

3、左官の親方 —— 乾 儀助 ——



儀 助 乾

鴨島で明治、大正の頃「左官の儀さん」といえば知らぬ人はなかった。この人が乾儀助である。

儀助は鴨島で十七代も続いた乾家で明治三十年頃生まれた。儀助は若い時から左官を習い、後には弟子数人を置いて左官業を営み、鴨島やこの近辺の建築には殆んど参加した。弟子の中でも父の跡を断いだ乾忠義をはじめ、岸田竹蔵、小倉和平、新開地の大谷等があつて皆、よい左官になつて活

動した。儀助は左官業を営んで成功したばかりでなく、よい弟子を養成して独立させた大親方である。儀助は頑丈な体格で剛毅な人で、高い屋根でも広い壁でもよく仕上げで喜ばれた。昭和八年十二月八日五十八才で世を去った。

4、あんま針灸師 —— 久保利九郎 ——

明治、大正の頃、鴨島本町の南側中央辺に「あんまの利久さん」と呼ばれた盲人のあんま、針灸師がいた。利九郎は治療のつぼを知っていてあんま、鍼灸で適切な治療を施して患者から重宝がられた。患

者は利九郎の宅で治療を受けたが、時には利九郎自身で鉄の杖をひきながら患者の宅へ出向くこともあった。盲人ながら道をよく覚えていた。

利九郎は弟子を置いて、厳格な指導をしていたので、よいあんま師を仕上げた。昭和十年頃から健康を害していたが、昭和二十七年人々より惜しまれながら九十才で他界した。

5、車造りの名人 —— 相原善蔵 ——

相原善蔵は、阿川村の生まれで昭和初頃、鴨島へ来た。森藤三谷の鍛冶屋や鴨島の岡田鉄工所で鍛冶を習った。善蔵は太平洋戦争に召集され、軍隊で鍛冶の腕を磨き、復員して鴨島東本町の北側の自宅で大八車の製造を始めた。車の木部を木工師に造らせ、善蔵は車の心金や外輪の焼き入れをして車輪を作り上げた。

終戦の頃、大八車は運搬にはなくてはならないもので、車輪造り仕事は繁昌し、注文に応じきれない状態であった。善蔵はこの仕事で産をなし、車製造を止めて新開地へ移り、公園食堂を営んでいたが、八十才で世を去った。

6、藍のすくも水師みづしの名人達 ——

武智兵吉・林 虎蔵 ——

明治から大正初にかけて、まだ藍は阿波の重要な産業であり、鴨島もその本場であった。藍葉は「床

寢せ」といって土面のの上に糶殻もみからをしき、その上に砂をおき、その上に粘をおいて、これをたたきつけて床を作る。この床の上に藍葉を一メートル位積み上げ、これを時々熊手で切返ししながら、水を撒まいて発酵させた。この切返しと水撒きの具合によってすくもの良否が決まった。それですくも造りには、水撒きや切返しに要領のよい人は藍師または水師といつて重宝にされたのであった。

武智兵吉は、上下島の水師として有名で、上下島の「山松」や「かね屋」、飯尾の「まるや」、鴨島の「北万」などへ水師に行き、名人の評判が高かった。兵吉は、昭和三十二年七十七才で他界した。林虎蔵は、鴨島本郷の人であるが、よい水師で大藍商の「本万」のおかかえ水師を勤めていた。

第四節 名物男、名物女

1、手風琴をひいて薬売り —— 中野喜之助 ——

明治四十年頃、金筋のついた黒の軍帽に、將軍風の黒色の軍服を着て、赤色の縦筋の入った黒のズボンをつけ、足に皮靴をはき將軍のような服装に肩に黒塗りのカバンをかけ、手に手風琴をもって弾きながら「おいちにの薬の効験は……」と曲に合わせて歌いながら征露丸などを売って歩く人があった。こ



中野喜之助
(顔面貫通銃創)

の人が「おいちにの薬屋」といわれた中野喜之助であった。

喜之助は土成町宮川内の出身で、長じて鴨島の本町の北側に移って来た。日露戦争の時、召集されて乃木將軍の部隊に属して、旅順二〇三高地の攻撃にも参加した。腕に貫通銃傷を受け帰還して療養した。戦後、薬の行商を思いついて手風琴を習い行商したのである。その当時は服装も手風琴も珍しかったので喜之助の歌を聞くと、子供等は馳せ集まり後からついて歩いたものである。

喜之助は性格のよい人でよく働いたが、昭和二十七年九月二十九日、八十二才で世を去った。

2、中野の「おヨネはん」——中野ヨネ——

中野の「おヨネはん」といえば、その頃（大正の初期）の有名な人でした。中野喜之助さんの奥さんです。岸田の「おろくさん」。林の「おひささん」。阿部の「おせいさん」と共に、その頃すでに女性上位の見本のような人でした。

おヨネはんは、喜之助さんと結婚して、鴨島へ出て来て、喜来でとうふ屋をして、鴨島の街へも売りにきていましたが、髪結いになりたいと決心したそうです。当時の髪結いのおろくさん宅の手つだいなどをして髪のおろくさん、結び方などを見てとって技術を覚えたそうです。「万」や鹿島屋等の女中さんの髪をただで結ってあげて練習をしたそうです。おとくいまわりについて行き、なじみとなり、「万」、川真田本

家、鹿島屋、馬越酒屋、てしまや、西麻植の工藤などのお出入りとなりました。又、弟子もおいて、花嫁さんの着付は徳島まで見習いに行つて稽古をしました。こうして一人前の髪結いになりました。その頃の結い賃は、二銭、三銭であつたと聞いています。

家の方では主人の喜之助さんが下駄の商売をはじめました。職人も置き、桐下駄作りもしました。天羽という職人さんがいた事をおぼえています。今の片山スポーツ店のあたりです。

昭和初期頃、今の西本町に、当時代議士だつた松島肇氏の借家がありました。それを小川繭店、和田齒科、中野下駄屋で共同で買とり、その後新築をして中野は宿屋をはじめました。富山の薬屋さんや県民プールがあつたので関西方面の大学生が毎年水泳の合宿に来て泊っていました。大変気さくで面倒見がよかつたので、学生からも「おばさん、おばさん」としたわれていました。しかし、気にむかふことがあれば、怒りとばす元気なところもあり、おそれられていました。おとなしい喜之助さんとは好一對の夫婦でした。

3、自転車きちがい — 瀬尾和三郎 —

まだ自転車を知らない人が多かつた大正の初期、鴨島の町通りを、赤白のんだら模様シャツを着た若者が、二輪の危ぶなそうな車に乗つてすいすい走るのを見て不思議に思った。これが自転車で、乗つていたのは若い時の瀬尾和三郎であつた。町の人は和三郎を「和吉さん」と呼んでいた。

和三郎は知恵島の出身であるが、鴨島に出て、本町郵便局の北辺で自転車屋を開いた。また、自分は各地の自転車レースに出場して成績を挙げていた。その頃、徳島池田間全国自転車レースが行われた。

これに出場して優勝し、和三郎の名を高くした。また、銀座通りの北の三叉路の北角でタクシー業を開いたが長く続かなかつた。昭和十五年頃、西麻植の工藤館が江川遊園地の改良をした時、和三郎は献策して事業を助け自分も園内に食堂を開いた。

終戦後、小松島に競輪場が開かれると、和三郎は役員に選ばれ、毎日通勤していたが、昭和二十九年五月十八日急に病に倒れた。六十一才であった。

和三郎は、進取の気象に富み、早くから自転車や自動車に先鞭をつけ、鴨島交通の発展に貢献した。

4、取りあげ婆さん — 筒井カメ —



明治、大正の頃、お産があれば手さげをさげてかけつけ、世話をしてくれる小太りのむつかしそうな顔付きをした婦人がいた。この人が筒井カメであった。

カメは敷地奥の宮西家で、安政五年七月十四日生まれた。長じて殿郷の筒井家の養女になったが養母が助産の心得があったのでその技術を受け断いだ。その当時は産婆を「取り上げ婆さん」といった。

カメは、鴨島やこの近辺のお産に招かれたばかりでなく、徳島へも招かれて一ヶ月も滞在したこともあった。カメはしっかりした男勝りで、夜でも招かれたら、一人で提灯を提げて取り上げに行つて喜ばれた。明治、大正の時代、鴨島辺のお産ではカメに取り上げて

貰った人は多い。カメは、昭和十八年七月十四日、八十六歳でおしまれながら世を去った。

5、髪 結 師 —— 岸田おろく ——

明治、大正から昭和二十年近くまで銀座通りの南辺西側に「おろくさん」と呼ばれる髪結師がいた。名前は岸田おろくであった。

おろくが髪結を始めた頃は、銀座通りに家が五、六軒しかなかった時で、髪結業者は極く少なかった。おろくは長身できりつとひき締った顔付をしていた。作法正しく技術は特に上手であったので得意客も多く、大家へ招かれて行くことも多かった。おろくは弟子を次々に置いた。指導は厳格で、躰しつけも技法もよく仕込んだ。中でも中野のおヨネはんや本町の岡田美容師のようなよい弟子も育て上げた。

おろくは髪結業に励んでいたが、昭和二十年八月二十六日、七十歳で惜しまれつつ他界した。

6、喜来の棒術師 —— 島村弥平 ——

喜来の東部、島村正臣氏の父弥平通称正之は、明治十二年生まれで昭和三十八年まで健在した。弥平は若い時、剣道の稽古を受け達人となった。そして、弟子二、三十人に夜稽古をつけていた。真影流を習い達人となり、あわせて棒術も教えるようになった。弥平が棒術の指導をするようになると、遠近から多数の弟子が稽古を受けに来た。その当時、棒術に使った棒は赤檜の丸棒で杖くらいの長さのへん棒、

五尺棒、六尺棒を使った。防具は剣道の防具を使った。

弥平の弟子の一人に喜来南部の岸田正稔の祖父忠平通称孝之がいた。孝之は島村正之より棒術を習い、特に上達して師匠が隠退した後は、孝之が自宅で大正中頃から昭和初頃まで棒術を教えた。

7、親分肌の消防組長 — 川真田泰蔵 —

鴨島で消防組が組織されたのは明治中頃で、義に勇む男達によって組織された。組の費用は篤志寄付によったので給料はなかった。組員は二十五名であったが、この猛者達の組長となる人は、健全な心身の備わった人が選ばれた。

なかでも二代目、組頭に選ばれた南八幡の川真田泰蔵は優れた組頭であった。泰蔵は、明治五年に大農家に生まれたが、若い頃より藍の玉つきに出て、一人前に働いたといわれる。

この頃の消防服は、前面に白で鴨と染め抜いた防火頭巾と背中にも鴨、右襟みぎえりに鴨島消防組と白に染めぬいた法被はちびであった。組頭だけは左襟に組頭と染め出してあったが、身長一八〇センチの泰蔵が着て、火事場に立った姿は男々しいものであった。

泰蔵は大正末期まで組頭を努めている。

火事が鎮まると、川真田組頭は組員を自宅に招き、酒食の接待をして組員を慰労するのであった。また、組員に難事が起こった時は、何かとよく世話をしたので信頼が厚かった。組頭の宅へ組員が来た時はお茶といって酒を出すのが常であった。このようにしたので泰蔵は、親分として組員より慕われたばかりでなく、一般の人々からも尊敬された。昭和十五年死亡されている。

大正になると、鴨島消防組は公設となり、鴨島消防団と改められた。川真田組頭は引続いて鴨島消防団長となって、鴨島を火事から守った。この頃から被服は町から支給されるようになり、団員が火事に出勤すると、五十銭が支給されるようになった。

※ 明治・大正の頃の消防

鴨島、喜来、上下島に夫々消防庫があつて庫内にはポンプ（その当時ばれんと言われた）、まとい 纏、おけ 手桶、二メートルの鳶口、一メートル半の鳶口などを常備してあつた。消防庫の近くには高さ十メートル位の木製梯はしこの火の見櫓やぐらが立てられて、半鐘が釣られていた。火が発生すると、組員が櫓を登って、半鐘をたたいて出火を知らせ、組員を集めた。消防庫に集まった組員は、かねてから定められている用具を携え、ポンプを車に載せて、引いて火事場へ急いだ。

ポンプは明治末までは木製のかまこ框型で、水を汲み入れて、ポンプのきこ桿を手で押して放水した。大正の頃から鉄製のポンプに吸い上げホースと放水ホースをつけ、桿を手で押して放水するものに次第に変わった。半鐘の打ち方は「カンカンカン」三連打を繰返えずと早鐘といつて、続けていること。「カン・カン」と点打を続けると鎮火したこと。「カンカン」と二点打するのは団員を召集する知らせであつた。

8、兵隊ばあさん —— 金山マキ ——

マキさんは、麻植郡中枝村別枝山字田平四百九十八番地（現・美郷村）で、父・楮山雪太さん、母・センさんの長女として明治元年十月五日に生まれました。そして同村大字別枝山字下浦八十五番地の一の金山小源太さんと結婚し、長女・タネさんが明治二十五年九月十八日に、二女・カツエさんが明治三



金山マキ

十一年三月二十四日に、三女・シケヲさんが明治三十三年九月十八日に、それぞれ生まれました。

長女のタネさんは、荷車の後押し中、同村の通称、ひん谷の土橋を渡っていたところ、土橋が崩壊、明治四十一年七月二十八日、橋と運命をともにして死亡しました。

鴨島町喜来へ移転して、三女のシケヲさんが髪結いを営みマキさんが手伝いをして暮らしていましたが、大正十三年四月十八日に、そのシケヲさんが死亡、夫の小源太さんも昭和

三年九月十九日に亡くなりました。

打ちつづく不幸に、マキさんは落胆の色かくせず、涙ながらの毎日でしたが、勇を鼓して、荷車で古物を買集め、生計をたてていました。

日中戦争、第二次世界大戦が勃発するや、一念発起、兵隊さん一心となり、武運長久の日の丸をかざして、毎日、神社まいりを欠かさず、出陣する軍隊の送迎には必ず顔を出し、ゆたかでない生活費を節約し、少しでも余剰金ができる献金をつづけました。

こうした、わが身を顧みず、ひたすら軍国に捧げた奇特な善行が認められ、総理大臣をはじめ、陸軍大臣、聯隊長、県知事、町長らから幾度も幾度も表彰を受けた。表彰状や感謝状の額が部屋いっぱいにかざられ、これを誇りと生き甲斐に毎日の生活をおくっていました。誰が名づけたか、このマキさんのことを「兵隊ばあさん」と。

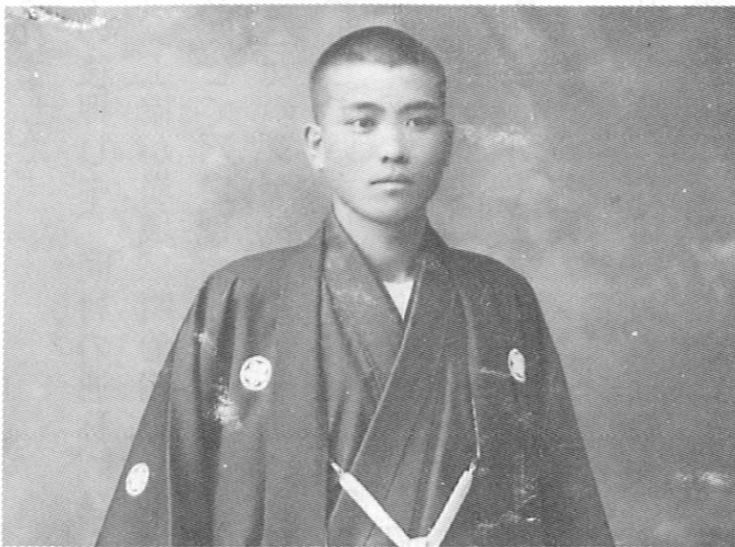
その名声は、つとに有名となりましたが、戦況は好転せず、昭和二十年八月十五日、敗戦を知らされるや、今までの気概も消沈、夢遊病者のようになり、近く墓に腰をかけ、泣き崩れていました。さも

ありなん——この姿をみかけた人びとは、兵隊ばあさんの心中を察してか、みんなすすり泣きしたという事です。

マキさんは、昭和三十二年一月十四日、出生地の中枝で静かに息をひきとっています。

9、麻植郡史編集者 —— 久保忠男 ——

父は明治二十年一月二十八日、鴨島町で誕生いたしました。そして昭和十一年二月二十日五十歳で死去しました。母は大正十五年八月十一日、三十八歳の若さで死去いたしました。父は長身でしたがやせていました。無口でしたが大変やさしい父でした。母が若死にしましたので、一人でよく子供の面倒を見てくれました。父はよく着物を着て、白いも引きをはき、後ろを帯にはさんで、面白い格好で鴨島郵便局の裏の暁コートへテニスを見に行きました。父はテニスはしませんでしたが、試合の時はよく応援に行っていました。父が男手で私達のためにやさしくして下さったので、父が大好きで子供心にも感謝していました。大きくなったら父に孝行しなければと思っていました。私も女学校卒業、間もなく大阪のラシャ地の問屋へ縁づきました。心にかかりなが



久保忠男

ら何もしてあげられませんでした。しかし、主人がよく出張しましたので、父が上阪した時は、よく食事につれていってくれました。そして、洋食の定食をたべました。そして洋食のたべ方のマナーを教えてくださいました。これ位の事は知っていないと外食の時恥しい事だといって教えてくれた事を思い出します。母の死ぬ時、父の手をしっかりと握って、子供をたのむと涙を流していた事が子供心にジーンとしました。父も母もお互いに余り話し合っていないままでしたが、母は父にすがっていました。よく父に仕えていました。生活は何時も貧しくてピーピーでした。心は何時も暖かかったと思います。

父の趣味は魚釣りでした。飯尾川へよく鰻うなぎを取りに行きました。「ずすぶし」という方法でミミズの大きなのを集めて来て、糸に通してかごに入れて、夜中に川につけおき、翌早朝に取りに行きます。天然の鰻で父の作ってくれたかば焼きの味は今も忘れません。父はまた晩酌をたしなみました。そんな時何時もは無口な父も楽しそうに面白い事を言ったり、よく歌をうたいました。鴨緑江ぶしでした。子供心にも上手だなあと思いました。夕方頃は、江川の水車小屋あたりへ行つて、ジャコを釣つて来て焼いたり、テンプラにして晩のおかずにしてくれました。私もついていった楽しい思い出です。

正木 かほる(土成町在住)

10、兄弟敵対戦争の悲劇

—— 岡本兄弟 ——

上下島の若宮八幡の社前に、石彫の狛犬が向かい合って立てられている。奉納日は大正十二年十一月、奉納者は岡田憲平、岡田猪平、岡田豊一と刻まれている。この三人は呉島の岡田節蔵氏の子である。岡

田家は今は岡本家となっている。

上下島の日野基太郎氏は、明治二十六年、勇心勃勃々活動の場を米国に求め、明治三十二年シャトルに渡りレストランを開いた。そして郷里より人を求め、上下島の岡田憲太郎氏、岡田猪平氏、杉山六郎氏、森藤より藤井正五郎氏、徳島の日野治三郎氏等をシャトルへ招いた。

中でも岡田憲平、猪平の兄弟は、その後も長く米国で活躍していたが、昭和十六年十二月八日、第二次世界大戦が勃発すると、兄憲平氏は家族と共に日本へ引揚げ、日本軍の通訳を勤めることになった。弟猪平氏は、米国に留まり、在米日本人の米国への忠誠心を示すため、米軍に入隊して南方戦線で戦功を立てた。昭和二十年八月十五日、日本が降伏すると、米軍の日本進駐となり、猪平氏は進駐軍として徳島の蔵本兵営に入った。

その当時、兄憲平氏は日本軍の通訳として善通寺の捕虜収容所で監視を勤めていたが、捕虜虐待の廉で、戦犯裁判にて公職追放となり、京都に移り住んだが就職に苦労した。

猪平氏は蔵本進駐中に、実家岡本憲一氏の家を度々訪れて、米軍給与物資の一部を贈与して慰めた。終戦直後は、生活用品が極端に不足した時であった。手袋や靴下、パン、チョコレートのようなものでも貴重なものであった。

米軍の蔵本撤退が始まると、猪平氏も軍と共に米国へ帰り余生を送った。

在米の兄弟が戦争のためとはいいいながら、敵対となり、明暗を分つたのも思いがけないことであった。この兄弟三人が若宮八幡神社へ狛犬を奉納した。大正十二年十一月は、岡田兄弟三人が若い盛りで、兄弟団結の意気が燃えた時でしょう。三人はこの年母屋を新築し、今も昔を思わせている。社前の狛犬を見ると、戦争のため数奇な運命に立たされた兄弟のことが思われる。

11、映画撮影所を誘致しようとした

宮脇由蔵



宮脇由蔵

昭和五年頃、鴨島駅前通りを「銀座通り」と改称した年に、宮脇写真館といって、モダンな構えの写真館があった。館主宮脇由勝氏は、江川遊園地内、山瀬及び鴨島公園にも出張所を出していた。氏は北海道旭川市出身で、大阪、東京の写真学校で技術を修得し、蚕都鴨島に魅いられてきた。

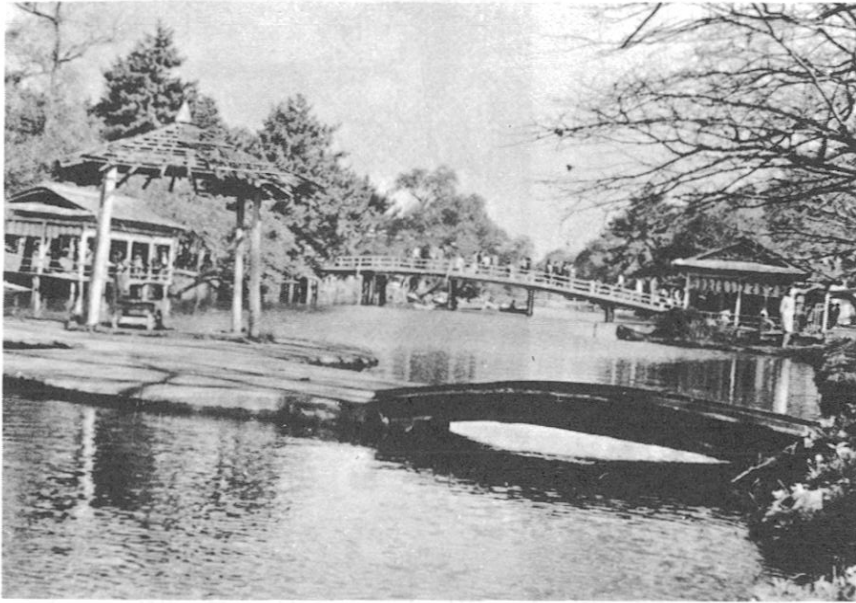
昭和六年十月三日、徳島日々新聞によれば、次のように氏を紹介している。

優声誇る 菊花の都、四国の名邑、鴨島にも 新時代の子 ミヤワキ写真館主は、一昨年の盆踊りに際し、優勝旗、その他景品を出し、数千の地方人を熱狂させた事は、目新しいことではない。更に問題の「銀座通り」の改称には文化座を借り上げ、市川団十郎公演を実施し、町民を無料招待している。

そして、今断然と鴨島町議選に望まんと抱負を語る『私は常に、人生に対してあらゆる努力を惜しまず、又、あらゆる犠牲にもたゆまず生きゆく人間として、鴨島が最も有望なる大事業に着手せんことを願っている。この鴨島町の超越した芸術心をつかみ、私は初めて写真師としての立場を得た。そして、町民のためにあらゆる犠牲を惜しまず、大映画撮影所誘致をかかげている。既に、尊敬すべき有志諸氏の血と涙によって出資も戴きつつあり、心から感謝している。名称も、各地映画ファン諸氏からの募集にあたり、各責任者立会の元に開票し、「太陽キネマ撮影所」と命名した次第である。地元有志諸氏も目下考慮しつつあるが、建設の日も遠くあるまいとっておられ、創業事務所をとりあえず、ミヤワキ写

真館内におく。』

ロケーション地として、遊園地の蛍狩り、鮎狩り、鴨島公園等もあり、意気込みは確かに当を得たのであるが、まだ鴨島には近代映画の花は遠かったのか、その後の消息がわかっていない。しかし、氏は文化座において、ジャズバンド、闘犬大会などいろいろな興業をしたことが残されている。



建設当時の遊園地

※ 本章研究発表者

渡 菊 石 和 日

辺 川 原 田 野

新 信 芳 喜

久

一 義 一 芳 雄

第二十章

私の歩んできた道

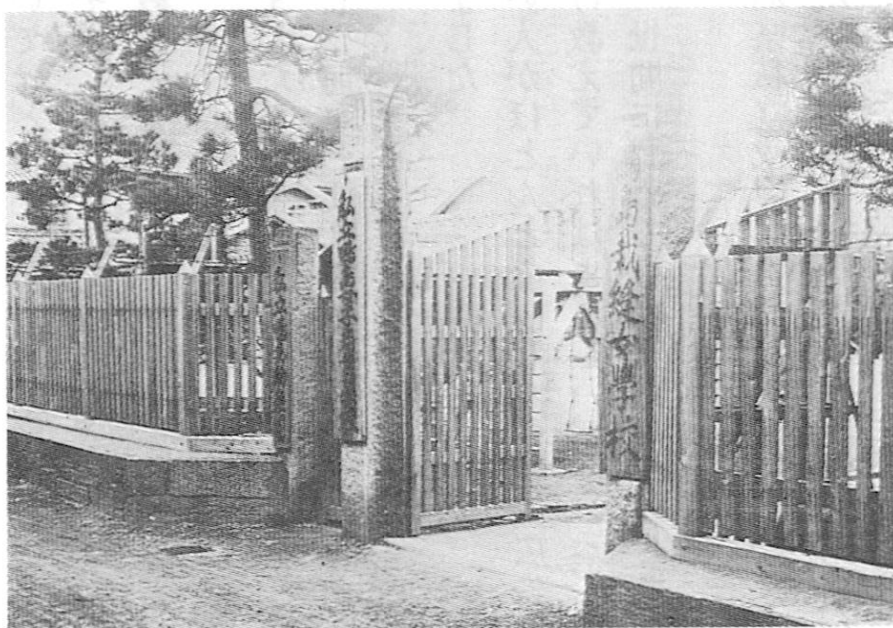
鴨島女子専門学校まで

私が東京裁縫女学校（現東京家政大学）を卒業し、上京以来六年ぶりに東京から帰ってきましたのが、大正六年の八月でした。

上京の時、母から

「東京へ勉強に行くからには、一人前の人間になるまで、決して帰らぬように」といわれ、固い志を抱いて東京に出ました。勉強のかたわら休みを利用して、手芸、茶道、華道と、広くいろんなものを身につけたいと思い、一生懸命張りましました。年をとった両親からの送金だけでは、決して十分ではなく、教材を購入するのに、身につけた和裁の技術を生かして、アルバイトもし、少しでもいい教材を数多く手がけたいと思い、努力したことを思い出します。

同校を卒業と同時に、群馬県碓氷郡尋常高等小学校専科補習学校教諭として奉職しました。翌年、同郡の後閉尋常高等小学校に移り、多忙な毎日でしたが、充実した生活を送っていました。



鴨島女子専門学校

森
サ
ワ
イ

ところが、突然、田舎の母から、「キトク」という電報がきて、びっくりして帰ってみますと、母は元気で田の草を取っていました。そして、もうこちらで落ち着いてはどうかといわれ、再び上京することをあきらめざるを得ませんでした。父も母も、年をとってさぞ淋しかったのでしよう。

大正七年二月一日、板野郡撫養町立尋常高等小学校専科訓導教諭として勤めておりましたところ、同年七月に、鴨島町東本町の北村多助先生が撫養へお越しになり、筒井セイ女史から、今度鴨島に裁縫女学校を設立したいので、是非私にきてほしいとお誘いを受けました。急なお話でもあり、色々と考えたのですが、鴨島であれば私の実家（浦庄）から通うのも近いし、何かと便利だと思い、帰る決心をしました。

大正七年九月一日、鴨島裁縫女学校の校長としてスタートしました。

当時は、生徒数も二、三人で、学校ができたことすら知らない人がほとんどで、私が、新聞広告をしてはどうかと、筒井善吉氏に進言しましたが、来てくれる人だけ教えていればよろしい、といって受け入れられず、親切に一生懸命教え、生徒に実力をつけることで、世間に認めてもらう外はないと思ひ、頑張りました。

開校して一年、生徒数もだんだん増えつつあった頃です。徳島県私立裁縫女学校の生徒の、男物裕羽織の早縫い競技会があり、当時、月一回講演にきて下さっていた、徳島高等女学校の森岡校長先生から出場してみないかとすすめられました。

私の学校は開校してまだ日も浅いし、古くからの学校と肩を並べることに、いささかためらいましたが、思い切って参加することにしました。

その結果、一位が徳島市内の高橋裁縫女学校、二位、四位、五位が私方の生徒でした。翌日新聞はそれを報じ、「日々新聞」本社の広間で入賞した作品が一般公開されました。私は出場した生徒の父兄と

共に見に行きました。

そして、一位に入選した羽織の衿先にそっと手を入れてみると、何と縫ってないではありませんか。衿先を縫うのと縫わないのでは、時間において差がつかます。

私はすぐ審査員の方に話をすると申しましたところ、

「先生、出場者全員が賞をもらったのですから辛抱しましょう。」といって父兄から止められ、審査のミスを認める結果になりました。これは私にとって生涯忘れることのできない、出来ごとでした。

やがて日本は支那事変、満州事変、更に太平洋戦争へと進展して、軍事訓練に明けくれ、結果は敗戦そのため裁縫学校はやむなく廃止されるに至りました。

敗戦後国内がやや平静をとりもどした頃、多数の卒業生や保護者の間から、女子裁縫教育の必要性を求める声が高まり、それに応えるために昭和二十一年九月一日、県の認可を得て、前の学校を再建して鴨島和洋裁縫女学校として出発しました。

再建の声を聞いて、待ちかねたように入学者が殺到し、かねて予定していた教室では収容しきれず、町内有志のご好意によって、臨時の教室でやっと授業ができるようになりました。

ところが、戦火はまぬがれたものの、昭和二十二年三月二十五日、銀座通りの「豊島屋」から出火し折りからの強風にあおられて、みるみるうちに一面の火の海となり、百五十戸を全焼し、苦心して築き上げてきたものを一瞬にして失ってしまいました。

そのため、一家は喜来の中尾一元氏宅の裏座敷を借りて、荷物を移して、不自由な生活を始めました。学校は喜来の徳住寺と麻植青年学校の一部を借りて、二ヶ所に別れて授業を始めました。しかし不自由にたえかねて、同年八月、焼跡に粗末な居宅を建て、やっと落ち着くことができました。当時は建て坪も制限され、木材等も配給で思うような家は望めませんでした。

二十三年五月には木造二階建ての校舎を建て、二ヶ所に分散していた生徒を統合し、本格的な授業ができるようになりました。

話は昔にさかのぼりますが、大正末期、当時鴨島小学校々長であった水田房次郎先生にお会いして、鴨島に婦人会を作りたい旨ご相談しましたところ、先ず町の有志ご婦人に呼びかけられてはとのご助言をいただき、早速、多数の方々のご賛同を得ました。

会長には故川真田タケ女史、副会長には故筒井トヨ女史、そして会計に私を選ばれ、三者が一体となって、今日の婦人会の基礎を作りました。当時の婦人会の服装は木綿の着物に、白いエプロンといういでたちでした。

活動を始めるには、先ず資金を作らねばなりませんので、当時、菊友会の会期でもありましたので、手始めに、自転車預りしてお金を作りました。

戦争中でしたから、出征兵士の見送りやら、勤労奉仕等、婦人会の活動もさびしい時代の中で、多忙をきわめました。皆さん積極的に参加して下さい、充実した会にすることができたように思います。

昭和五十一年一月、教育法の一部が改正され、専修学校制度が実施されることになり、設備その他の諸条件が、文部省の設置基準に十分達しているということで、専修学校の認可を受け、昭和四十八年には鉄筋三階建ての校舎を新築し、校名も「鴨島女子専門学校」と改名し現在に至っています。

私のおいたち

鈴木 花子

私は明治末期、今の石井町の農家に生まれ、子供時代は朝の連続ドラマおしん（昭和五十八・五十九年）そっくりで、朝は大根飯、ひる菜飯、夜はおねばの青菜の雑炊でした。

ご飯といえば麦が八割、米が二割位で、学校の弁当は麦ご飯に梅干一個の毎日でした。それでも一生

懸命勉強しました。

学校から帰ると、畠の手伝いや風呂わかしやら、夕飯の支度等で休むひまもありませんでした。夜は小さいランプの明り一つで、母は夜なべ、子供達は勉強しました。

大正七年、初めて電燈が一戸に一灯、今の十ワット位だったと思います。それでもどの位うれしかったことでしょう。

貧しい小学生時代の終り頃、大正十二年九月一日正午、関東大震災が起りました。東京の人々は大火災のため大勢焼死致しました。生き残った人達もたべる物もなく、住む家着るものもなく、文字通り生地獄だったそうです。私達児童は大きなバケツをもって、一軒一軒梅干しや衣類を貰いに行ったことを、今でも忘れません。

その後食生活も少しずつよくなり、半麦ご飯も食べられるようになりました。そして私は昭和三年、鴨島町の現在の家に嫁にきました。主人二十才、私十八才で、子供同士の結婚でした。丁度その年は今上天皇ご成婚の大式典行事が、全国的に行われました。

鴨島町でも全戸に青、白の縞しまの幕と、家紋を入れた大提灯ちようちんをつるし、昼は旗行列、夜は提灯行列で盛大でした。

当時私の家は、蚕種製造業を営み、夏の間は男女合わせて百人以上の従業員が働いていました。この頃の鴨島町は、人口も少なく、蚕室からかもじま駅の汽車の発着がよく見え、汽車の発着するたびに駅員さんが、紅白のハタを振って合図をする姿が、よく見えたものでした。

戦争中の生活

それから十余年、男児三人も小学校に入学しました。その頃から世界の状勢が次第に悪化し、蚕種製造もできなくなり、蚕にあたえる桑も殆んど掘り返され、米や芋を作る田や畑に変わりました。いよいよ

魚一切、トウフ一丁買うにしても、長い列をならばなければ買えなくなりました。三度の食事もご飯は一度位で、あとは芋ガユやゾウスイ、バレイシヨ、カボチャで空腹を満たし、子供達は成長しました。昭和ひとけたに生まれ育った子供達は、みなこの道を通ってきたものです。現在五十才前後の人達はたべる物もなく、着る物もない中を、お国のためにと生きぬいてきた者ばかりだと思えます。

衣料の方でも布地は全部配給で、子供の服や下着、はきものまで自給自足で、昔の古着をほどいて学生服を作り、ネンネコの衿を使って足袋たび、細い部分で下駄げたやぞうりのハナオを作って、それはそれは朝の五時から、夜の十時まで休む暇はありませんでした。それでも誰一人不平もいわず、お国のためにとがんばってきたものです。

いよいよ昭和二十年七月初め、徳島市が空襲にあい、市民は命からがらにげまどい、当地にも大勢の火傷をした人達が集まってきました。幸い鴨島町は空襲をまぬがれましたが、私のうちでは子供三人が腸チブスにかかり、隔離させられました。

その時、避病舎は満員で、廊下にも仮のベットを作り、通る所もない位で、薬や食物もなく多勢の人が死んでゆきました。徳島から火傷をした人達も入ってきて、それはそれは大変でした。

夜は灯火管制で明りをつけることもできず、ウジ虫が沢山湧いて痛い／＼と泣きわめく有様は、さながら生き地獄そのものといえましょう。

それから一ヶ月余り、苦しい毎日が続き、八月十五日遂に敗戦の詔勅が下り、苦しかった戦争も終わりました。その間、広島、長崎の原爆で多くの犠牲者をだしたことは、終生忘れることはできません。

戦後の手記

いよいよ戦争も終り、アメリカ兵が進駐してきて、日本も全て変わりましたが、戦争中の様なことはなくなり、何とか人間らしい生活に少しずつもどりかけてきた昭和二十二年三月二十五日、午後四時頃、

鴨島町銀座通りの旅館から出火した。

みるみるうちに一三五世帯が焼失しました。折角空襲にも逃れ、疎開していたものを元に修めたところを、全部焼いてしまいました。戦後で水の便が悪く消防団員も少なく、その上風が強く、消火どころか焼け放だい。夜七時すぎになってやっと片倉製糸のコンクリート塀で鎮火致しました。それが鴨島町の大火として歴史に残っているのです。

火事は恐ろしい。何ひとつ残らず、灰ばかりの中で途方にくれました。

しかし、皆で力を合わせ、がんばり、それぞれの道を歩んできました。

私の家は幸に蚕室が二棟焼け残りだったので、それを改造し住みつき、住宅には不自由を感じませんでした。ただ、現金収入がなく物はなく、苦しい一、二年が夢中ですぎた頃、町内には夫や息子を戦死させた多くの未亡人が、収入のあてもなく仕事もなく、貧苦に耐えていました。

その時、徳島市内の焼跡で編物教室を開いている山田キク先生のうわさを聞き、私達も若い頃から覚えていた編物教室を開き、無職の未亡人に教えてあげ、少しでもお役にたてないだろうか、町の有志の方々にご相談やらお願いをしました。

その間、山田キク先生のご指導を受け、やっと二十四年七月、鴨島町民生委員協議会編物授産場として、焼け残った蚕室の一室で、町内の未亡人を対象に町から編機一五台を購入して貰って希望者を募集致しました。多数の人が集まりましたが、すぐ収入に連がる訳ではありません。昼夜に分けて編機は交代で使いながら、それはそれは必死で勉強したものです。

私達も授業料は無料、教材の毛糸の世話やら大変でしたが、みんなの努力で少しずつ好転し、未亡人ばかりでなく一般の子女も募集しました。年々数を増し初め、一室が二室三室と、どんどんとふくれ上りました。

二十九年には県知事の認可を受け、名称も鴨島編物女学院として新たに発足致しました。ここで授産場から公認の専修学校として、国鉄の定期の許可もあり、名実ともに編物学校として県下に名を出しました。生徒も各方面から集まり、西は三好郡、美馬・阿波・麻植・板野・名西郡まで学生割引定期を使って鴨島駅をにぎわせました。定員は昼一五〇名、夜五〇名を超過し、職場では片倉製糸、筒井製糸で働く女性のため出張指導し卒業証書、講師免許状を授与しました。

その後教室もせまくなり、現在の鉄筋校舎を建て、教師も十名余りで指導に当り、朝は早くから夜おそくまで教えました。私は毎年夏には東京へ出かけ、一ヶ月位は編物ばかりでなく、色々女子の教育に必要な指導の勉強を致しました。

卒業生に講師免許状を取る人も多く、免状をもった人は次々と教室を開き、遠くは高知市の佐喜浜や日和佐から指導者の派遣を頼まれ、各方面で編物人口をふやしたものです。

山川町では公認沢田編物女学院、美馬編物教室、地元では山名編物教室、後藤田編物学院等々、今尚その名を残し活躍しております。しかし世の中は大きく変わりました。世界は高度成長時代に入り、日本でも婦女子の職場が開放され求人が多くなり、どんどん職場へ進出するようになりました。

三十七、八年頃から、私の学校にも生徒を引きぬきにくくなりました。その上、戦後子供の数もへり、どここの家庭でも生活は豊かになり、女の子も大学に行くようになり、編物を習う娘は次第に少なくなりました。経営も困難をきたし、五十五年には休校のやむなきに至りました。

しかし、編物は全国的にゆき渡り、鈴木で習った人は良い仕事ができるというて、今尚、全盛時代の名残りとして誇りを保っております。何だかまとまりのつかないまま、拙ないペンを止めます。

『こまねずみ』のように働きとおした

三 倉 マ ス エ

私は美馬郡木屋平村三ツ木で、明治三十四年八月十二日に生まれました。学校は高等小学校と補習科を卒業して、裁縫も習いました。その当時の学校は生徒は十九人内女子は四人でした。私は十八才の時鴨島に来て、大谷屋（今の田村さん家）へ女中奉公にはいりました。私の夢は将来仕出し屋の商売をしてみたいと考えていました。

そこで二年四ヶ月つとめました。元村さん（今のみどりやの元の店主）のお世話で、三倉へ嫁にとのぞまれました。三倉には兄弟が九人もありました。長男の私の主人に当る一二さん外に、娘二人男六人で未子は四才でしたので、一度はことわりしましたが、三倉のお母さんにぜひにといわれて嫁ぐ事になりました。母親はよく肥えた人で四十九才でしたから、これからだと思っていきましたのに、五十四才で死亡しました。三倉は当時口入屋を商売にしていたので、つねに多くの人が入り出していました。父親は綱太郎といって人力車家業をしていました。一時は四十人も車夫を使っていたように思います。明治大正にかけてこの家業をやっていました。私が嫁にくるとすぐやめて、千二さんの散髪の仕事の手伝いにいっていました。口入屋は性に合わなかったようです。私の主人は学校卒業後、大阪に出て桶屋の修業を七年して帰りました。そして桶屋の商売をしました。桶類一式と木の風呂も作っておりましたが原田のおじいさん（原田表具店）にすすめられて、葬儀屋もはじめました。私はお母さんが早く死んだので、子供の世話を一手に引きうけて、それぞれに一人前の社会人にしたつもりです。千二さんは散髪屋に。美代さん愛子さんは美容師に、訂さんは養蚕教師、五郎さんは西条で桶屋、康次さんは大阪で散髪屋してましたが、今は三倉屋会館の専務役をしてくれています。私の嫁いだ頃は、かめやの借屋を二戸借りていました。共同井戸でしたから、炊事、洗たく、掃除、風呂用の水は井戸から汲んで帰り、朝か

から晩まで、こまねづみの様に働きました。仵さんがよく手伝ってくれた事はうれしかったです。葬儀屋をはじめてからは、その仕事も手伝いました。昭和十四年主人は三十七才で若死にしましたので、脇町で桶屋と美容院をしていた仵夫婦が鴨島へ帰り、今の家業をつぐことになったのです。

主人の死後は家事と葬儀屋の仕事に専念しました。祭壇作りにも出ていきました。そして家族の理解もあって、和田さんが婦人会長の時はよく出席しました。民生委員にもえらんでいただいて、厚生大臣賞をいただき大変光栄に浴しました。

私は金光教を信仰しています。家族仲よくまた人には親切に、常に感謝をもって暮しています。商売については儲けばかり考えるのではなく、誠実にして相手の気持になる心がけです。

槇の門の思い出話

本村 真 喜雄

一、私は喜来の槇まきの門

明治中頃から喜来の村で過ぎたる門が三つあると、いい伝えられてきました。その第一は喜來徳住寺の鐘樓門であります。二番目の門は、喜來からはじめて県会議員に当選せられた中尾英一氏が、毎日出入りせられた門であります。三番目にいい伝えられたのが私で、喜來の生きた門であります。

私がこの世に生きてきたのは、今から約二百年位昔の天明の時代です。今日、皆様からめずらしい門だ、このような門は、県内たずねても二ツとは見当らないなどと、ほめてくださるようになりました。

さて、私の育ての親は、岸田嘉藤太という、文化の時代に生まれた人です。この人は天保時代に、庭木や盆栽作りに趣味をもち豊かに暮していたのですが、たびたびの水害になやまされ、ここに移転してきたのです。この時に、門を作るつもりで、植えたラカン槇まきは三年生でした。

ここは喜来ではカアラ畑という位で、土地は悪く石ころが多く。地力はありませんが、水害の心配のない土地でした。辰己にはまるい。の庚申さんがあり、文政七年から祀られているから、私と同じ頃でした。

西隣りには野神さんの社地跡があり、大きな楠の切株が何ヶ所にもあった頃でした。

この邸の入口の両方へ植えられ私は順調に育ち、明治時代に入り門として形が整った頃、西側の槇に病気がついて枯れてしまいました。

枯れた後へ植えてくれたのはラカン槇でなく、四、五十年若い。の犬槇でした。この槇は葉が長く、よくのびるので、私に追いつき、日清、日露の大戦争の終り頃には、槇の門として形が整い、人々からほめられるようになりました。

育ての親の嘉藤太さんがなくなってからは、息子の藤太さんが手入れをして、河岸の護岸工事の請合の仕事をし、息子の浅吉さんと共に手入れをしてくれました。三代で請合仕事で大儲けして、明治二十六年に寢床六間を建て、明治三十八年には四間の倉を新築した。大工は岸本貞之助さんで、後に大正十年頃、鴨島の文化座を建てた人です。

この頃、倉のできあがるまでに、木材を運んでくる人や、色々な職人さんが出入りして、私を見上げて、喜来村で過ぎた三ツの門の中に数えられるようになりました。



まきの門

ところが、倉ができ上ってから六年後、明治四十四年に藤太はんは死去し、浅吉さんは事業に損をして、家屋敷を売って大阪方面へ引越してしまいました。育ての親方様一家とお別れしなければならぬ悲しみの時でした。明治大帝のおかくれ遊ばされし年でした。この時に売った値段が、土地が十七アール、母屋が延二十四坪、寢床が三十坪、新築して五年目の倉が二十坪で、その他、地上にあるもの一切といえます。

即ち、私と、それから庭までの十間余りの両側に置き並べてあった盆栽や、庭木を全部含めて金千円におつりがあったそうです。

二、本村さんは四番目の主人

私の邸を買ってくれた四番目の主人は、本村堅太郎さんで、明治の末吉野川の改修工事で善入寺島が全戸立ちのきになり、喜来村へ移転してきた九人の中の一人です。

本村家は、粟島では一町百姓の藍作農家でしたが、毎年たびたびくる水害に苦勞を重ねながら生きていた一家でした。私は、この邸は水害の心配はありませんよといいたいが、私の言葉は通じませんでした。

邸を買い求めた堅太郎さん一家は、契約書を交して、浅吉さんの弟に留守を頼んでおいたため、他の庭木や、盆栽はみんな枯れたり、売られたりしました。大正三年に本村家一家が移転してきた時、ああい主人に代ってよかったと思いました。

喜来南郷の方々を招待して酒宴を開いた時、招かれた人々は私を見上げて、主人が変わったんだ、何時までも喜来の槇の門として永らえ、手入れをしてと頼んでくれました。

本村堅太郎さんが大正三年十一月二十六日死去し、五代目の主人は喜資さんにバトンタッチされました。この頃でした。私（槇の門）を買いすが、畠一反位でゆずってはくれまいかと、世話人の話があ

ありました。が、善入寺島で生まれた長男の真嘉雄が、槇にあうので、「何程に買ってくれても売らな
い。」といって、真喜雄さんと同じように、可愛がってよく手入れをしてくれました。

粟島で生まれて真喜雄と名付けた子供が、槇の門のある邸に縁があるとは。人は槇の門の家に生まれ
たんだから、真喜雄とつけたのだと間違えているのであります。

三、藍作そして養蚕の頃

藍作で忙しいのは七月から八月にかけてで、広い新庭にむしろを一面に敷き並べて、葉藍の束を朝早
くから五分位に切り、むしろの上でかわかす作業です。夕立がにわかにくるようになった時など、家内
中の人が忙しく取入れる。私は、早く雨のふってこない間につまえてと、祈る心でハラハラしました。

その頃は寢床のおぶたは、たじまや。という藍商人に貸して、二十人余りの村の若い人が玉つきさん
で通ってきて、私を見上げて、毎日にぎやかに出入りしました。

今思い出しても恐しかったのは、大正八年四月、欧州大戦の祝賀の提灯行列のあった翌日、昼火事で
母家の草屋根が火を吹きだした時のことです。一時はどうなることかとハラハラしましたが、玉つきさ
んが皆手伝って、消してくださり、家の道具も出してくださり、寢床も倉も無事でした。

明治時代から阿波藍としてさかんに作られていた藍作も、欧州大戦後になり、ドイツの化学染料が輸
入せられるようになり、藍作は次第に衰微の一途となり、藍商人の藍代の不払いができたのもこの
頃でした。

しかし、藍作に代って養蚕が次第に多くなり、蚕に家からせり出されて外で寝たり、棚の間で寝るぐ
らい、多く掃き立てするようになり、これに鴨島の製糸工場が競争でかま。数をふやしたのでした。

阿北の名邑鴨島、産業ふるう鴨島と学校々歌に唱われ、私の東隣りの林と重清の両家は、麻植郡一、
二の養蚕家でした。

この頃、私の西隣で、十間余りの竹をついだ柱を立てて、天気予報を奉仕活動として始めた貫心倶楽部がありました。

これは養蚕家に利用して喜んでもらいました。昭和三年五月から養蚕期間中実施したのです。ご協力をくださったのは、糸製糸の笠井専一さんで、毎日午後四時に電話で徳島気象台へ、明日の天気を聞いてくださり、これを待ちうけて、急いで旗を揚げるのが、主人の息子の真喜雄君でした。白は晴、赤は曇青は雨の三通りの旗で、晴後曇の時は白旗と赤旗を揚げる。私は毎日予報が当るよう祈り続けました。

その頃はラジオもなく、養蚕家は桑を取り込む都合で、待ちかねて利用してくださったものです。

主人の喜資氏は関東大震災の大正十二年に、難産で妻に先立たれた為、息子に早く嫁を貰いました。西隣りの重清佐市さんの仲人で、蚕を飼うのが上手な嫁をお世話して載き、棚の間で寝る位に蚕を飼いました。

昭和四年頃の結婚式は、皆自宅で行い、朝から郷中の人を招き、お手伝いさんは一番席で、二番目は親戚の人で、夜は表客、仲人に嫁さんに送り手、式は芸者の盃で三々九度の式をし、高砂小屋で朝までよくはずみ、夜明けには雨戸をしめて呑んだものです。お酒は八福神一升一円二十銭の時でした。

昭和六年に本村家では長女が生まれ、昭和八年一月長男賢次君が出産しました。

この年の四月、私の前の六尺道路が若宮神社の馬場の延長として、二間道路になり、鴨島駅より立場（たてば）を通り、麻植塚に通ずる道路になりました。この為、有楽座で毎年始まる四国菊人形の時は、見物客が私を見上げながらほめてくれました。この嬉しい思い出の年に、私の刈り込み手入れを手伝ってくれる真喜雄君が、眼病で失明してしまいました。

私は困ったことになったと思いい心配しましたが、半年位で少しずつ見え始め、一年後には元位は見える程に治り、安心致しました。

槇の門からの天気予報も、養蚕家の皆様から喜んで利用して載きましたが、竹が折れる頃からは、ラジオも天気を報じるようになり、昭和十年に町長花枿筆太郎さんより表彰状を載きました。その時の真喜雄君は二十四才でした。槇の門の私が頂いた位嬉しく思いました。

昭和十二年の日支事変が始った頃より、絹糸は人造絹糸に相場を圧迫せられ、養蚕と製糸業は次第に衰え始めました。

四、戦時下の食糧増産

昭和十三年近衛内閣の時、国家総動員法が制定せられ、これに伴い、昭和十五年に農業増産報国推進隊員が各町村から二名ずつ選出することになりました。鴨島地区からの一人として、十五年十二月、茨城県内原義勇軍訓練所で、一ヶ月間徳島中隊長浅山安一氏と、寺井道助君と同班で、県内二百六十名の隊員が特別仕立ての列車で入隊しました。日輪兵舎で泊り、東条総理大臣を始め、石黒農林大臣、各大臣に加藤完治先生の農民精神のあり方や時局講話を聞き、翌十六年一月十六日、食糧増産の重要なことを心に誓いました

帰った真喜雄主人は、鴨島の大政翼賛会の食糧増産指導員に任命せられ、推進員五名の一人として卒先して桑を掘り返し、米麦や甘藷の増産に励みました。夜は常会が開かれている各地区へ出席して、甘藷の増産に役立つお話や、芋の宇平さんという紙芝居をもって行って、木村寛二さんと森山、牛島、西麻植と鴨島の常会を回りました。余興に浪曲や落語をやって笑われて、夜おそく帰ってくる毎日でした。兵役の果せない自分が、少しでもお役に立つことを願って励む心でした。

翼賛壮年団では松茂の飛行場の勤労奉仕では一週間の宿泊作業に参加しました。共に汗を流した鈴木長三郎さんや、川真田豊重さん、牛島の山内勉さん、森山で川端武夫さん、敷地で須見徳実さんで、和田島の飛行場へも一日参加しました。今も思い出話を川端さんと山内さんと、真喜雄主人はするそうで

す。主人が喜来消防団で会計をしていた時、忘れることができない大きな思い出として、こわかった鴨島大火のことでした。昭和二十年の徳島空襲の時より近くで感じた恐ろしさでした。

五、大火の恐い思い出

昭和二十二年三月二十五日、銀座通りの南端より起った火災は、折からの西の強風に猛火となり、見る間に東へ東へと燃え広がり、筒井酒店の焰ほのおは道路の南側にとび移り、次第に火の勢おいを増し、秋葉はんまで燃え移りました。この境内でとまるだろうと思っただが、南側の火事は森裁縫学校を燃やし、北側の元町の酒屋だった農協に移り、倉庫の米の運びだしの後、南側は真鍋製材の広場で、北側は中野ラジオ店の家を倒していくとめようと、家の柱を切ってロープで四、五十人もが引き倒したが倒れず、猛火は東へ延焼し、やっと片倉製糸工場の西のコンクリート塀でとまりました。西側の金光さんは免れました。この時の火の粉は私の門の上にも多くふりかかり、これから百米も東のクサヤに落ちた火の粉が燃えだす位。見張りの人で消しとめました。私の門の母屋はクサヤなので、屋根の上で水をかまえて大ぜいの人が見張ってくれましたので、燃える心配はありませんでした。

この火災で百五十戸余りの被災者ができました。折角戦災をまぬがれたのに、一面の焼野ケ原となるとは、実に火は恐ろしいものだとつくづく思う私、槇の門であります。

私の第一の母校は鴨島小学校

梶 博 久

(1) 私の生い立ち

私は明治四十年九月八日、八幡神社の北側にある、筒井家の次男として出生、現在七十六才と五ヶ月になります。

さて、この筒井家は、玄眠以来八代続いた由緒ある医家で、八代目の元吉は私の実父、先年亡くなった外科医の筒井肇は私の実兄、その長男の候彦が十代目の医師として、外科と産婦人科を開業しています。

大正三年に、当時の鴨島尋常高等小学校に入学、大正九年の春県立德島中学校（当時は富田浜側、今の万代町、現在は城南高等学校として市八万町）に入学、同十四年春に同校卒業、一年間浪人（その間に牛島小学校の代用教員を三ヶ月勤めたが、余り出来がよくなかったのか、僅か三ヶ月でお払い箱になった）。

大正十五年春、阪大の前身である大阪医科大学予科（旧制高校理科乙類）に入学、昭和四年阪大医学部に入学、同八年三月同大学医学部を卒業、産婦人科教室に於て研究、同十三年一月に学位受領、同十四年六月一日、梶産婦人科病院（戦災まで寺島本町西にあった）後継者となって今日に至っています。私の生い立ちと現在までの経過の記憶ですが、小学校に入学するまでの幼児のことは、おぼろげで断片的なものであり、取り立てて記すほどのことはなく、子供時代の思い出は主として小学校入学以降のことです。

その頃の記憶をたどってみると、私は手におえない喧嘩早の、我がまま小僧で、受持ちの女先生（大久保、提両先生）男性教員では、日野、志摩、長野、中の諸先生方を手こずらしたようです。

当時、教頭に柏木先生が居られ、私のことで父のところへお叱言をいってこられ、その都度父から叱られたことを記憶しています。七十年も前の時代では、医者の子供といえ、全く今いうエリート階級で、父の顔で町の人々が遠慮してくれているのをいいことにして、随分ノサバったようでした。ところが、小学校四年の春、父が盲腸炎のために四十才の若さで死去したのですが、その時の悲しさは今でも涙をもって回想されます。



それにもまして、子供心を痛撃されたことは、それまで父のおかげで許して貰えていた我儘が、もう誰かからも許して貰えなくなったことでした。これが子供心の折れに一つの転機を与えてくれたような気がします。

院 満一才に満たないで実母を失い、十才でまた父を亡くしたのですから、私達兄弟は決して幸せな生い立ち病 ではありませんでした。

しかし清貧に甘んじ、仁術を行っていた父ではありましたが、僅か乍らの遺産のおかげで中学まではたいした不自由もなく勉強ができ、庭球の選手を務め得たのですが、医師になるのには旧制高校から大学と七年の遊学が必要であったのです。

こうなると、兄の学資は捻出できても、私までは及ぶべくもなく、私が通学を志すためには誰かの援助を仰ぐか、養子にでるしか道がありませんでした。ところが、私のできが余りよくなかったため、巨額の学資を出してやろうと喋ってくださる方はなく、折角阪大予科に入学しながら、明らさまに云えば路頭に迷うような始末でした。

その間に、筒井製糸の初代社長、筒井直太郎氏のお姉さん、セイ女史が私のことを心配してくださって、物心両面に大変お世話になりました。もし、この方がおられなかったなれば、入学も勉強もできなかったのではないかと、今でも深い感謝の念を忘れていません。

ところが、救いの神が現れたのが、阪大の予科に入学した夏休みに、初代梶病院長の完次博士でした。

この先生は、亡父の医学校の後輩で、父の生前親交のあった方で、厳格な学者肌のお医者さんでした。私は、昭和二十二年二月に他界されるまでの二十年間、叱られ通しであったといっても過言ではない位でした。

しかし後になって、思い出をたどってみると、そのお叱言は実は理に叶ったことばかりで、私が及ばずながら、梶病院の業績を継ぎ、世界の方々ともまともにおつきあいをさせていただけのも、物心両面にわたるこの先生のご援助ご指導と、自身我が子にはほどこせない、理性に富んだ愛情のおかげであったと思います。

ここで一寸変ったことで、現代であればかばかしいとも思われることで、それは、本人の知らないうちに、私は何時のまにか梶家の養子にされていたということです。この問題については、紆余曲折がありました。先代の切望であり、筒井家における私達の後見人であった、叔父と先代との約束でもあったということです。

育ての親に対する義理あいもあって承諾し、昭和十二年四月、名実共に私は梶家入りとなったわけです。当時の私は勿論、この養子縁組みに余り抵抗は感じなかったし、今もたいして後悔の念はありませんが、現今に比べて、人情と社会の風潮のうつろいを、ひどく感じるがあります。

かくして梶産婦人科病院の二代目院長となり、今日に至ったわけですが、菲才浅学のこととて、たいして社会のお役に立つことができず、ひたすら戦災で失った病院を復興することのみ専念して参り、約十年前から独り息子の博が事実上三代目を継いでくれたので、最近はずの手伝いの明け暮れです。

隠退したわけでなく、時々はメスをとることもありますので、この方面では徳島県では最高令ではないかと思えます。

(2) 現在の私の働き

このように充分の余暇を与えられたので、現在の私は約四年前から山本徳島市長に進言して、「茶のみ友達相談所」を設立し、独身老人の生きがい対策のために同相談所の参与として働き、八十七組のハッピーカップルをつくり上げました。

今後もこのボランティアに精を出し、私の老後を少しでも社会福祉のためにささげたいと願っています。どうか鴨島町の独身老人の方々もご遠慮なくお申込みください。手続きは私に電話（〇八八六一二二―一六八〇 梶病院）をいただければ、できる限りお世話をさせていただきます。

尚、それとは多少の関連性はありませんが、性生活の相談に応じています。これは私の個人の仕事で、私の病院をお訪ねくだされば、別室で秘密厳守、無料で私の知識の範囲でご相談に応じ、ご指導させていただきます。この方面にご不満やご不審な点があれば、ぜひお越しくください。

(3) 暁会テニスクラブ

前項までは私事で恐縮でしたが、私共の若い頃の思い出として、最も大きく残っているものは、何と云っても暁テニスクラブのことだと思えます。

もはや、ご記憶のある方は非常に少ないと思うのですが、今の藤川病院の西隣りで、鴨島のメインストリートの所に元の郵便局（局長は川真田喜八郎―同敏夫氏）があり、その裏の油屋さんの畑地を地均してテニスコートがつくられ、暁テニスクラブは十四、五名の会員であったと思えます。

それらの方々が殆んど毎日テニスの練習をしておられ、私は中学に入ったばかりの小僧っ子でした。門前の小僧習わぬ経を読むで、中学二年生の頃には結構暁会の皆さんのお相手ができるようになって、これが三年生から徳島中学校の正選手になる跳躍台になったわけでした。

この暁テニスクラブが、いつどんな経緯でできたのかは定かではありませんが、大正八年か九年ではなかったかと思われまます。

それは、本県に於ける軟式庭球の全盛時代で、同クラブからは川真田利雄（うどん屋の長男）さんと同文雄さん（油屋さんの末っ子）の組は、県下の第一人者で、度々県下の大会で優勝しトーナメントのシード組でした。この最強組の他に、郵便局長の川真田敏夫氏と、私の実兄筒井肇の組も、鴨島小学校に於ける県下大会に於て、県下筆頭プレーヤーといわれていた。藤井、直山組を倒して優勝したことがありました。

それからだいぶんおくれてですが、たしか昭和三年頃、川真田正雄君（敏夫さんの末弟）と、私の組が飯尾小学校での県下大会に優勝したこともあって、暁クラブは県下でも有数な選手を排出したテニスクラブでありました。

私が徳島の梶家に移った頃から、大学の勉強に追われ、テニスにも余り熱中することができず、郷里鴨島とも疎遠になったために、暁クラブがいつ頃どうなったのか記憶がないのは、非常に残念に思いますとともに、申し訳なくも存ずる次第です。

暁クラブが盛んだった当時、最も活躍したのは、前記の川真田、川真田組、それについて川真田（局長）と筒井（私の兄）組、その他亀井さん（お名前失念）と通称御大の川真田利資さん、北村の猪さん長江千一さん、油屋のひろしさん、まれには川真田郁夫氏も見えていたようでした。

その他の方々は、もう六十年も昔のこととて、忘却の彼方に去ってしまったことは、遺憾という外はありません。

(4) 暁クラブの応援団

暁クラブのテニスが強かったばかりでなく、その応援団が異色であったのです。

お年からいうと、佐藤文右衛門さん、久保忠雄さん、齒医者さんの和田千賀一先生、川真田敏雄、正雄両君のお父さん（亀はんと呼ばれていた）等で、佐渡さんが今徳島本町で終戦直後から機械工具店を

開いて大成功をおさめておられる善二郎さんを、自転車に乗せて何処までも応援に来て下さったこと
又日本手拭で頬かむりをした上に、麦藁帽子をかむった長身の久保さんと、赤髭の和田先生の面影が、
今でも目に浮かぶようです。

このようにあの当時の鴨島は、住みよいところであり、あの頃は実に平和な古きよき時代でありまし
た。私は折にふれて、郷里の昔を思い出してなつかしんでいるのですが、暁クラブ関係の方も殆んど亡
くなられたようで、最若年であった私が、七十六才になったのですから、無理からぬことだと思ひます。

(5) 鴨島小学校同窓会

私は、最近数年来鴨小時代の同期の諸君と、寺井道助君のおせわで、年一回同窓会を持っています。
男女合わせて二十名位が集って、楽しい一時をすごしています。

(6) シングル会 (音楽同好会)

大正十四年の春からであったと思います。筒井肇 (私の実兄、当時大阪医大予科三年在学) が中心に
なり、森分晴夫 (私の徳中同級生、当時私同様浪人組) 戸田正晴、敏弟君 (筒井セイ女史の長男、次男
) 日野本吾氏、北村多助氏、筒井康二君 (現筒井製糸会長)、岩城昌一氏 (元筒井製糸重役) その弟将
君、女性では筒井磯枝さん (筒井製糸前社長夫人) 小山さん (お名前失念) 加藤マサエさん (鴨島裁縫
学校職員)、が寄って音楽会をやるうということになりました。

第一回は裁縫学校の広間で、第二回は鴨島小学校講堂、第三回は文化座でした。

当時のこととて、今程音楽が盛んでなく、歌謡曲なども、「枯れすすき」「金色夜叉」等で、主とし
て童謡、ハーモニカ、オルガン等の合奏や独唱、第三回では、「音楽気狂いのお医者さん」という軽喜
劇をやったこともありました。

これも、もう少し継続したかったのですが、経費も可成りかかるし、私が徳島の子になり、休暇中で

も余り鴨島で逗留することが許されなくなり、他にも色々の事情ができたため、第三回で打ち切りになつてしまつたのは残念でしたが、私達にとって愉快な青春の思い出でした。

(7) 当時の医師の動静

前述の如く筒井家は、鴨島近傍では最も古い医家で、四代位前には蜂須賀藩の御殿医を出したこともあつたと聞きます。七代目の萬甫の時代には近郷近在では唯一軒の医家あつたそうです。

八代の元吉（私の実父）の時代になると鴨島町では、シブイチさん（本名不明）と大一さん（本名藤井）の二人のお医者さんができたのですが、この御両人ともお酒が好きで、年中酔っぱらっていたという事です。

その点では、私の父は碁気狂いで、往診にはお尻が重かつたけれども、呑ん平ではなく、しかし八代も前からの由緒ある医家であつたため、近郷の名あるお家は殆んど全部、筒井家の患家であつたということです。その後、いつ頃か定かではありませんが、飯尾に大久保英雄先生、西麻植に上野賢蔵先生、麻植塚に髭三本で有名だつた森本先生が居られました。

どの先生も皆夫々一家をなし、立派に生計を立てておられ、側室を何人も持つておられた先生もありお医者さんは皆女好きだといひ伝えられたのも、この頃のことであつたと思います。

新居先生が大一さんの後に開業されたのは何時頃であつたかわかりませんが、この先生は非常に温厚な先生で、町民の信望が厚かつたときいています。上田幸先生は大正四、五年に開業されたと思ひますが、よく働かれた仁術医でしたが、先生がはじめて乗り出されたオートバイで、喜来の踏切りで列車事故のためなくなつたのは惜しまれることでした。

藤川良雄先生が鴨島で産婦人科を開業されたのは昭和の初期のように思ひますが、今尚ご健在で、ご令息に先立たれたことは非常にお気の毒ですが、現役として医療に従事しておられることは、敬服の外

はありません。

その後、沢山の先生方が開業され、徳島市に次ぐ医師過密町村になっていますが、これらの先生方のことについては、私より町民の皆さんがよくご存じのことだと思いますので、言及することは略させていただきます。

まだまだ多くの思い出があるのですが、記憶も年のせいでは不確かでありますので、比較的是つきりと私の脳裏に残っていることを書き綴りました。郷里の方々がご寸暇に一読願えれば幸甚に存じます。

油屋の家業の変遷を追って

川真田 晋

(1) 昔の油屋の思い出

明治の前から、鴨島の油屋、板野郡鍛冶屋原の角屋、阿波郡八幡内田、県下では三軒かなかった店で商いは油を売る店、文字どおり菜種から油をしぼって売っていたので油屋という名前がつけられた。

トウシミ（灯心）に火をつけ、夜の灯りとしていた。それからロウソクができ、石油が出てランプとなった。お客は、西は川田・学・川島、東は石井・藍畑・高原、南は山を越して名西郡の広石・阿川・樋山路・東山。山の人は割り木、炭などをかきつけて、それを売って買い物をし帰る人が多かった。

店には、生まれてから死ぬまでの品が揃っていた。藁ぞうりから下駄はいうにおよばず、昔は水がめの大きなものを死んだとき使っていたので、水がめも裏庭にたくさんあった。藍の盛んなとき、むしろ二枚で俵をつくり、荷物を送るのに、印に焼判をした。油屋は兵、川真田市太郎氏は本万、川真田徳三郎氏は北万等と押していた。当時はその印だけで、その家がわかった。

油屋の店では大番頭が次々と変わっている。穴吹から藤本、川島町から鰻渕儀平、川島町浜から松原

惣助、山川町から戸井吾一、原井元平さんら。現在では、皆さんりっぱに生活している。店の店員は私
が知っているだけでも二十人あまりいた。

昭和十二年、風邪がもとで両親が同時に死んだ小学校四年の藤井徳夫君を、なんとか面倒をみてほし
いと大西九平氏がつれてきた。私は引き受けることにした。彼には義務教育終了の卒業証書だけは持た
せてやりたいと思い、昼働いて疲れ、夜居眠りするのを激励し、むりやり勉強を教えた。二年後、当時
の小学校長だった金子先生にお願いし、六年生の試験を受験させ、無事に卒業証書をいただいた。彼が
二十二歳になったとき、商人には不向きと感じ、郵便局へ入れてもらい、よい家庭を築いている。

(2) 電気店を決意する

私は子どもの頃から商人で生きようと決心していた。終戦後の物資不足で、配給制となったので呉服
店をあきらめ、電気店に切りかえ、技術で生きようと決めた。折しも国立療養所ができて、専属の取引
店としてお引立てに預り、四十余年間にわたってお買い上げをいただいた。その間、拡声機の取りつけ
各病室のインターホンとテレビの取りつけ、また時報にチャイムで音楽を自動で出すことができないか
との相談があり、設計完成をさせた。それに鴨島の菊人形の人形を動かすのも私の考案したものであっ
た。

私は小学校で、川真田郁夫氏や川真田省三氏は同期でした。彼らは旧制徳島中学へ進んだが、私は店
にいる二人の丁稚とともに奉公している気持ちで家業に精出し、油屋をつづけてやろうと決意した。そ
れで、店を閉めたあと、中学校へいつている友に負けまいとローマ字の書き取りなどよくしたものだ。
昭和四年から手紙を書く練習を思いつき、家にきた通信文を手帳に写し、たえず習得につとめた。今も
思い出の手帳が残っている。毎晩、遅くまで起きて勉強していると、兄や姉にも迷惑をかけることがし
ばしばあった。

昭和十二年、無線技師の試験を受けに大阪へいった。中学、大学の卒業生と肩をならべて受験したが幸い合格した。県下で十三名だった。放送局の嘱託としてラジオ無料相談員になり、板野郡神宅・一条・柿島・八幡・市場、麻植郡湯立・学・川島・牛島・名西郡石井・藍畑などを毎月一回出張していた。その間、無線監視委員をし、昭和二十年までその職にあった。思い出すと、昭和十八年六月十三日、川島警察署の警官に始末書を書かされたことがあった。夜、勉強をしているため、奥の部屋の電灯を消していなかった。夜十二時を過ぎると、空襲管制になっていたが、窓ガラスに布切れを三重に覆って点灯していた日常の方式から、布が一枚、止め針から放れて、灯りが漏れていて注意されたのだった。昭和十九年には無線技師合格者のうち十名が召集され、特殊潜航艇に乗務、すべて帰らぬ人となった。

終戦からしばらく経て、テレビ時代の幕あけとなる。鴨島で初めて油屋電気店にテレビを備えつけた。大相摸がはじまると、柿島・川島・牛島からも集まり、駐在所からきて交通整理をしたという嘘のような、ほんとうの話。店の中は人の熱気で、陳列ウインドが曇り、みんなが座わっていたあとは汗でびっしりぬれていた。当時鴨島でテレビを取りつけていたのは、両方と筒井製糸、喜来の岡本邸、敷地の須見邸くらいであった。これからはテレビが普及する、修理の研究をせねばと努力し、どのメーカーのものも修理できるようになった。昭和四十二年から字引きを作ろうと、常用漢字を新聞の中から書き取り、一冊の辞書として仕上げた。

わが家のきまりは、昭和五年から家計の金銭出納を正確に記帳することだった。昭和三十年、所得税の決定不服申し立てをし、税務署長に面談、例の出納帳をみせて説明、税務署側も納得される材料となった。昭和三十年から青色申告ができ、鴨島町青色申告会副会長に推され、永年務めさせていただいた。今なお歳を顧みず、同会の相談役をお引き受けしている。

(3) 電気商組合での働き

昭和三十二年、徳島県電気商業組合が設立され、組合長に徳島市の潮電気さん、副組合長に私が選ばれ、三百五十余店が参画した。しかし、不況つづきで取り引きが現金化されたので、店の経営に苦しむ店が多くなってきた。そこで県庁と商工中金に交渉を重ね、借入れ契約をまとめ、四億円の融資に成功した。一店におよそ三百万円、同業者からは非常に喜んでもらえた。これを基礎に電気業界はおかげで不況しらず、盛大に商いができてきたといえよう。

(4) 私のやりとげた事業

徳島市二軒屋町から南へいくと上八万町がある。同町の農家十六戸は水質が非常に悪いので、水道設備ができないかとの相談を受け、私は東芝電気の技術部に無理に設計図を作製していただき、県庁へ見積書を提出し許可を得、私一人で取りつけ工事を一カ月がかりで完了させた。今に各地から、その設備を見学、研究にきていると聞く。

無口で平凡でほんやりに生まれたが、ただ一筋に正しい道を歩みつづけ、誰にも負けない努力のおかげが今日をもたらせたと自負している。これからも生涯この精神を貫き通す覚悟でいる。

ふるさとと私の思い出

奥 本 彦 市

(1) 私の幼き頃

わたしは、明治三十七年五月十日、鴨島町字飯尾北門九四番地に生まれ、八才で飯尾敷地尋常高等学校に入学しました。私の同級生は、男子四名、女子二名の計六名で、一年生から六年の間競争がはげしく、わたしは子守りしながら、本を手からはなした時がない位でした。六名全員優等生でした。その時は優等は金メダル、皆勤は銀メダルを鴨島小学校で、部長さんより頂きました。五年の時、敷地の須見

さんが吉野川で死亡、六年では高橋君が中学へ進学したので、残り四名となり、高等小一の時、私が飯尾敷地尋常高等小学校代表に選ばれ、金メダルを頂きました。

高等小二年になって、徳島工業を受けるべく勉強しておりましたが、山へたき木取りに行き、切り株にて足を傷し、それが悪化して試験にいけず進学をあきらめました。

(2) 藍作業の思い出

わたしの小学校時代は、農家の畑は藍と桑畑でした。わたしの家は半商半農で農閑期には父は金物の行商に県外に行き、農繁期に家に帰り農業をします。父の留守は祖母、母、私の三人です。

藍苗を植え、朝夕井戸に木の鳥居を組み、長い竹にツルベをつけ、二人がそのツルベで水をくみ畦へ流す。朝早く晩おそくまで水を入れる。藍葉が大きくなると晩おそくまでかかって刈り取り、家にもち帰り、朝三時頃よりおきて庭に高い台をこしらえ、わたしが上へあがり、父が台の押切機に葉をかましく小さく切る。切り終ると庭に薙むしろをいっぱい敷き、切った葉を薙一面にひろげる。それを、かり竿で歌をうたいながら調子よく葉を打ち、ほうきで掃きよせ、またかり竿で何回となくたたく。カサカサになるまで乾して薙で作った角い俵につめ、仲買人に売る。仲買人はそれを藍商に売る。

藍方はその葉を藍床に入れ、水をかけたりませたり、毎日それを続け本床が仕上る。うすに入れ、三、四人でつき、沢山の人が歌をうたいながら意気さかんに働いていた。

鴨島には「万」両家、戸田、鹿島屋、敷地角、飯尾石、西麻植工藤、たくさんの藍商がいた。阿波の藍商の中でも、鴨島の「万」、敷地角、飯尾石は全国でも名のうれた藍商でした。

この藍にちなんでタコ揚げがさかんになり、藍の仲買人の手数料が多いため景気がよく、大きなタコを作り、沢山の人をやとって鴨島浦の川原で、タコ揚げ試合が盛んに行われた。私もよく見に行きました。色々飲食店が出て、酒によって喧嘩したり、試合に勝ちでもすれば大変です。

隣人が大きなのほりを何本もこしらえて迎えに行きます。それからが大変で、帰って大酒宴がはじまるのです。

(3) 養蚕業の思い出

その藍も外国の染料がくるようになり、農家としてもだんだん藍作りをやめ、桑を植えるようになりました。わたしの家も桑苗がたくさん入用ですので、父が補木接木、わたしがイグサで接いだ所を巻くのですが、十アールに植えるには何千本という木が必要した。

鴨島は養蚕がさかんでした。昔の蚕は小さい時から、竹で作ったエビラに莖をしき、細い目の網をかけ、その上に桑葉を切つてふると、小さい蚕があがってきて食べます。だんだん大きくなるにしたがい仕事が多くなり、五令期になり上族する前になると、竹でこしらえたエビラ十三段も高いところに、一日何回となく上げ下げするには、並たいていの労作ではありませんでした。

養蚕の全盛期には、鴨島には大小の製糸会社が十に余る位ありました。工女さんも千人近いぐらいで、鴨島の町は晩がくると工女さんばかり。それにつれて他町村からも若い男が来てにぎわしいことでした。

(4) 鴨島で金物店を開店

私が鴨島で店を開いた時は、大正十五年、昭和元年二月一日頃でした。この家が新築した時で、知人に頼んで貸してもらい開店したのです。その当時は家も少なく、前の松島、木造三階建てで松島茂さんが散髪屋をしており、西隣りが松浦タケさんの家、その隣が北井鉄力家でした。その前に妹瀬という踊りの師匠がいて、弟子が沢山おりました。

その隣りがあんまの久保力さんというて、針あんまが上手でよくはやっていました。

(5) 菊の思い出

菊花展は、初めは駅北の筒井製糸の空地で開催されました。初めてというので、非常な人気でした。

それで町の有志や愛好家の人々が会員を募り、本町前の広い土地を借り、大々的に県外に宣伝し、名古屋より人形師を雇い、香川県より松尾という弁士を雇い、家も幾棟も沢山建てました。

いよいよ開館となると、毎日千人近い見物客で、多い日は何千人という日もあり、県外よりも淡路、和歌山、兵庫、香川、愛媛、高知など団体客が多く、汽車やバスが着くたびに、朝から晩まで、私店の東側通りは人でいっぱいでした。

私の店は川島より徳島間の阿波縦貫自動車の停留所をしていましたので、自動車の着くたび降り降りが沢山あるし、土産物も売っておいりましたので、会期中は家族全員てんてこ舞いのありさまでした。

菊人形も初めは少なかったが、年々多くなり、段返しも十五段返しと人形の数も沢山ありました。余興は毎日変わる物、二十日位で変わる物などで一日いても飽きることがない位でした。菊人形がすむと今度は九州より霧島苗を沢山仕入れて霧島人形を開催しました。初年度はめずらしいので沢山お客がありました。菊人形のようなことはありませんでした。

(6) 戦争中の生活

大東亜戦争がはじまると、娯楽施設は閉ざされ軍事工場と変わりました。終戦後、喜来岡本氏の土地で菊友会を再開しましたが、さほどになく、次第とやまってしまいました。

鴨島町も養蚕の盛んな時までは、私店も蚕具、農機具等売っておいりましたが、面白い程よく売れました。他の店も繁昌していました。しかし戦争がはじまると同時に、桑は全部掘り返され、食糧増産に変わりました。

男は兵役にとられるか軍事工場に徴用され、私も市場の飛行場造りに毎日通いました。店の方も商品は皆統制され配給となり、金物は供出し配給の品の他は全部なくなりました。私は西尾農協に働き、松根油製造所の主任となりました。

毎日飯尾の事務所に通い、農家より掘ってきた松の根を受取ったり、その根をオノで小さくはつり、よき根っ子であれば油がとれるが、根が若いとよい油がとれないので苦勞しました。

各町村とも、同じなのでオノがよく売れました。高知よりの仕入れを毎日のように、各農協が販売するので、遠方の農協よりも買いにきてくれました。女の人も食料配給のため色々苦勞していました。

何さま食料がないので色々苦勞したのです。

松根油作業中に敵機と日本の月光とが交戦中、敵機が一機急降下して機銃掃射をあびせ、皆壕の中へとびこみました。皆無事でした。その後、徳島の空襲があり、B29のものすごさは、今だにその恐しさを思い出します。

食料は色々な物を食べました。米ヌカと麦粉でパンを作り、ゆで干し、南瓜を砂糖の代りにしたり、米ヌカや麦粉のだんごのあんにしたりしました。又、芋のつるを食べたり、蚕のさなぎの油揚げにしたのを子供と共によく食べました。食べれるものは皆食べたと思います。

「かたぶつ」でとおした人生

浦 島 武 一

私は、明治三十四年一月二日、浦島林吉の長男として生れた。私が十二歳の時、父は病死したので、以来戸主として、母を助けて生長した。そして二十三歳の時、喜久江と結婚した。早く母を安心させたかったのであるが、崇拜する母も大正十二年死亡したので、悲痛に沈んだ。

当時、鴨島は蚕都鴨島といわれ、県下唯一の養蚕、製糸の中心地として栄えていた。私は、この養蚕で生計を企てようと着眼し、養蚕技術を習い、養蚕教師の免許を修得した。また妻喜久江と協力して、養蚕業を営み、年間繭三〇〇貫を生産するようになった。

この砌^{みきり}繭売買業の免許を受けて、購繭員となり、生家のために精励努力を惜しまなかつたので、母屋を昭和八年に改築し、次々と付属家屋を再建できた。更に昭和二十八年五月、中央橋が開通したので、その沿道に貸店舗を建設し、将来の発展に期した。これが今日の街筋の発展に大いに寄与したと思う。顧りみるに、昭和二十二年選ばれて、鴨島町議会議員となり、引き続き四期当選させていただき、その間、議長などの職責を全うすることもできた。特に思い出深きは、鴨島公園の一件である。

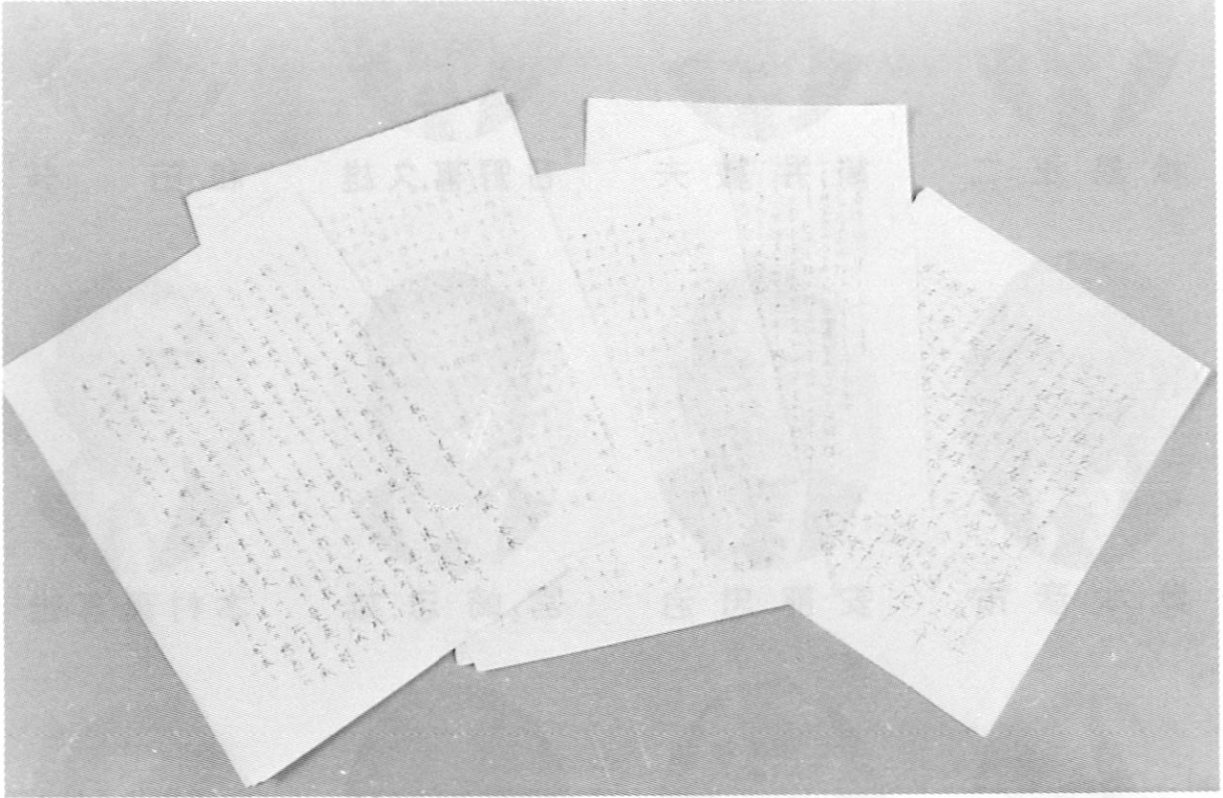
戦後の本町の財政は極度に窮迫していたため、町は現体練場を含めた広大な公園敷地を、やむなく金十万円で去却する由を聞いた。当時としては高額とはいえ、憂慮に耐えず、同志議員と相図って、寢食を忘れ、東奔西走し、ついに松村善蔵氏の篤志寄付を求めて、買い戻すことを得たのである。そして現在の鴨島公園を造成することになった。

この快挙は、実に社会のためとなり、莫大な町有財産を存続せしめた。

また昭和二十一年、農業会理事となり、麻植協同病院の開設に注力し、その開院式には代表して式辞を述べる栄に預った。

その後は調停委員に任命され、社会奉仕をすることができた。而うして自治功勞の勲六等瑞宝章を天皇陛下より授与され、妻喜久江と共に皇居豊明殿において賜わる光榮に浴した時は恐惶感激のいたりであつた。

はげましの手紙



森 サワイ

ご寄稿いただいた方々



浦島 武一



三倉マスエ



梶 博久



鈴木花子



松島正二



筒井敏夫



日野喜久雄



和田芳



奥本彦市



安部忠治



宮崎忠雄



本村真喜雄



竹内捨次郎



渡辺新一



石原芳一



川真田晋



千原木健

編集委員会

工入マ倉三



井内 衡

左巻重

経過及び編集報告

私は、天寿会の皆さんとは親しくおつきあい頂いておりましたので、大村弁一氏（昭和五十七年当時、町連合会長）と町当局（厚生課）より、高齢化社会に対応するいきがい対策（県補助）事業の実践計画の相談をうけました。そこで、次のような取り組みを提案させていただきました。

- 一、文化活動（鴨島ふるさと研究）
- 二、スポーツ活動（ゲートボール愛好者の組織運営）
- 三、社会奉仕活動（地区別継続的な実行）
- 四、世代間交流（三世代の交流の実行）
- 五、婦人部活動の奨励

今日では、それぞれ着実な成果をあげられているとおります。これらのひとつに、和田芳様をリーダーとする鴨島地区ふるさと研究会の誕生がありました。

しかし、長期計画というのは、お年寄りの皆さんにとっては、大変な重荷となり、ご心痛の年月であったかとお察し申し上げます。

この学習会も、初年度は三十五名の出席で、熱気もありましたが、次々と健康上の理由から参加者は減っていききました。しかも、教育委員会の文化財保護委員さんを中心とする同様の活動が起こり、「豊かな歴史と文化財」続いて「名水百選の江川」が出版されました。一方、専門的な知識も少なく、お年寄りの足で尋ね歩く収集方法では思うように進みません。原稿用紙の枠も見えない方もいるのです。こ

のような状況の中で、和田様の忍耐と日野喜久雄先生の並々ならぬご努力に、会員は勇気づけられました。

私は少しでもお役に立つことができたらと、お世話が続けることになりました。この間、多くのお年寄りからいろいろなお話を聞くことができました。おかげさまで、めったにできない勉強をさせて頂きました。そして、私がどなたからも共通して強く心をうたれたのは、お年寄りは額のしわに応じた知識を積みまれ、人間味豊かな郷土愛を抱いておられるということでした。いいかえれば、お年寄りは貴重な文化財産なのです。皆さんの資料をまとめるとなると、私では力不足を感じずにはいられませんでした。皆さんが「私でよい」というお言葉に甘え、一生懸命気を配ったつもりですが、ご期待にそえなかつた点も多くあるかと存じます。どうかお許し願いたいと思います。

しかし、この報告集は、皆さんの聞き取り帳だけに、はじめて紹介される内容もたくさん含まれています。今日忘れ去られようとしている鴨島の昔のことを知りたくなつた時、必ずや辞書の役割を果たしてくれることと信じています。

なお、鴨島にはまだまだ貴重な資料が残されています。私達の手が届かなかつたことについては、さらにご加筆下さり、後世に継承下されば幸甚に存じる次第です。

最後になりましたが、ご寄稿下さつた方々、昔の写真をご提供下さつた方々、校正のお手伝いをいただきました町教委の曾我部訓博さん、(有)坂東印刷所の方々に心から御礼申し上げます。

監修 井内 衡

編集にあたって次の文献を参考にさせていただきました。

○学 習 会 (テキスト)

鴨島読本(昭和五年頃がり刷) …… 筆者不明

吉 野 川 …… 久保康生編 毎日新聞社

徳島県の歴史 …… 福井好行著 山川出版社

日本の歴史 …… 井上 清著 岩波書店

○参 考 文 献

日本の子どもの遊び(第三集) …… 石川松太郎編 直江元治編 第一法規

日本の子どもの遊び(第五集) …… 仲 新編 第一法規

阿波こぼれ話 …… 猪井達雄著 徳島市中央公民館

四国の城 …… 山田竹糸著 毎日新聞社

日本服装小史 …… 水尾比呂志著 筑摩書房

日本庶民生活誌 …… 宮本常一著 中公新書

日本陸軍史 …… 毎日新聞社

ノンキなトウさん建碑に寄せて …… 鴨 島 町

○写 真 集

阿北の名邑 蚕都鴨島 …… (株)筒井製糸所・竹内捨次郎

源太の渡し写真集 …… 浦 島 武 一

兵器大図鑑 …… 毎日新聞社

筒井製糸所 …… (株)筒井製糸所

写真集 徳島一〇〇年 …… 徳島新聞社

現代写真、カット …… 井 内 衡

表紙デザイン
重本隆助

ふるさと読本
あゝ鴨島

1987年10月1日 初版発行

非売品

編集発行 鴨島ふるさと研究会
代表 和田 芳
印刷 (有) 坂東印刷所
徳島県麻植郡鴨島町鴨島454
電話 (0883) 24-2234代

落丁、乱丁は、お取り替えいたします。

